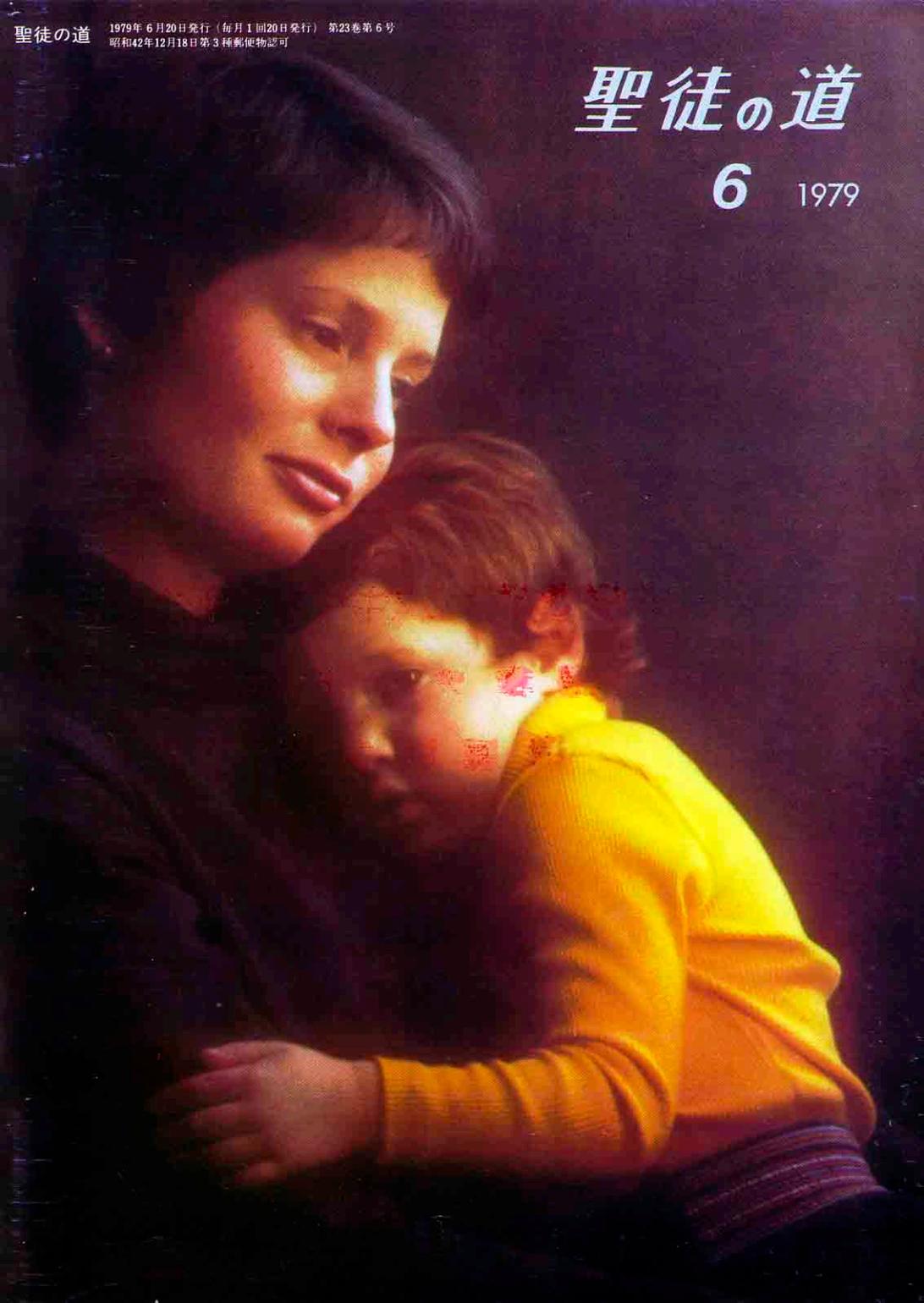


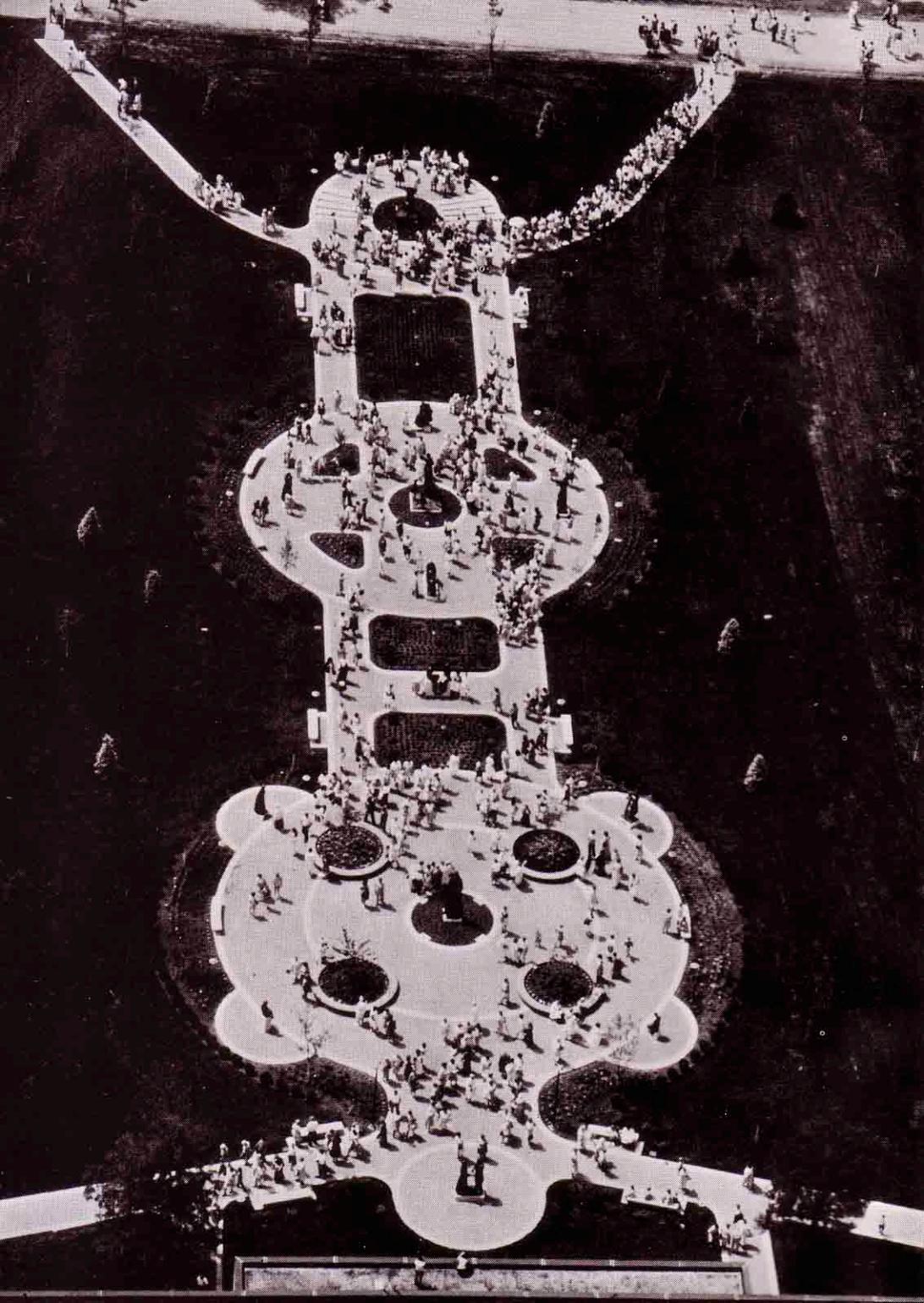
聖徒の道

1979年6月20日発行（毎月1回20日発行）第23巻第6号  
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

# 聖徒の道

6 1979





# も く じ

## 大管長会

スベンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

## 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

## 顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
ヒュー・W・ピノック

## 教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

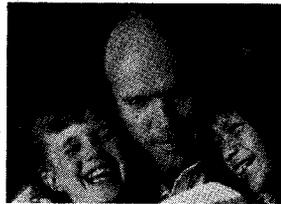
## 国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)  
キャロル・ラーセン (編集副主幹)  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

## 「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

豊かで満ち足りた人生	スベンサー・W・キンボール	2
歴史上の姉妹たち	ブルース・R・マッコンキー	6
女性と聖典	マリアン・C・シャープ	14
家族の霊性を養う父親	ニール・J・フリンドグズ	18
家庭を治めるとは	ジョン・フリンドグズ	22
妻の再発見	トーマス・W・ラデーン	25
質疑応答		28
ぬりえ		31
小さなお友だちへ	マリオン・D・ハンクス	30
しんてんがかじだ!	スーザン・A・マドセン	34
たねまきのたとえ話	ナオミ・W・ランドール	36
おもちゃばこ		38
愛の報い	レアード・ロバーツ	39
作り話が本当に	マーガレット・クブラー	46
反逆の王子とリベカ	E・D・テルフォード	48
神のみ前に立つ	ジョセフ・F・スミス	53
あの光は一体どこから	スーサ・ヤング・ゲイツ	59
ローカル・ニュース		60



## 聖徒の道 6月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30  
印刷所 株式会社 精興社  
配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19  
定 価 年間予約1,700円 1部150円  
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA0584JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

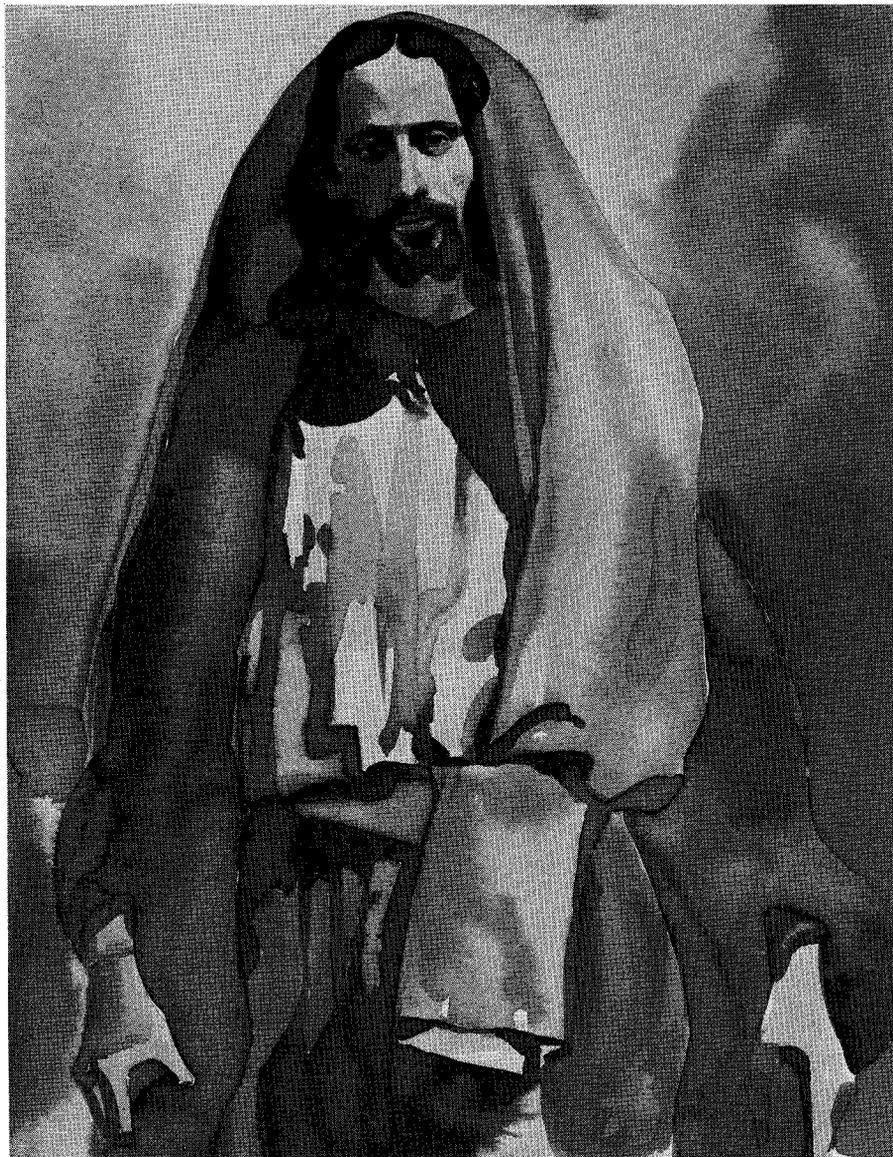
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

(写真左)

ノーヴーの扶助協会記念公園

# 豊かで満ち足りた人生

スベンサー・W・キンボール



ナザレのイエスは次のように語っておられる。

「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」(ヨハネ10:10)

人生は永遠であるということを語らずして、私たちは豊かで満ち足りた人生について語ることはできない。現世と言われるこの狭い世界の、私たちに与えられた短い期間の中で、完全な正義、完全な健康、完全な機会を万人に与えることはできない。しかし、恵みにあずかるにふさわしい生活をした人々には、結局神の計画に基づいて完全な正義がもたらされ、やがて他の条件や祝福もすべて完全なものとなる時が訪れるのである。

そこでこの現世と呼ばれる短い期間の、日日の生活の中に、このナザレのイエスの教えを確実に取り入れる方法を知ることが是非とも必要になる。

第一に、他の人々に奉仕することである。そうすれば、次のよりよい世界に住むための備えができると同時に、現世の生活をもっと意義ある楽しいものとすることができる。私たちは実際に奉仕することによってこそ、奉仕の仕方を学べるのである。私たちは隣人への奉仕に携わる時、その行為によって人を助けるばかりでなく、自分自身の問題を新たな観点から眺めることもできる。私たちは、関心を他の人々に向ける時間が多くなれば、それだけ自分のことをあれこれ思い悩む時間がなくなる。奉仕の奇跡のまさしく中枢に、自己を捨てる者は自己を見いだすというイエスの約束が存在するのである。

私たちは日々の生活の中に神の導きのあることを認める時、自己を見いだす。そればかりでなく、適切な方法で隣人によく奉仕すれ

ば、その熱意に応じて、心の中に充実感を覚えるのである。事実、自分自身を知ることは容易である。なぜなら、そのような要素が私たちの中に数多くあるからである。

ジョージ・マクドナルドは、「人と親しく心を交えるようになるのは、愛されることではなく、愛することによる」と語った。言うまでもなく、私たちは愛されることを必要としている。しかし、健全な人生としっかりした目的意識を持ちたいと思ったら、いつも受けただけではなく、与えなければならない。

第二に、イエスの教えは生活や様々な状況に対する正しい見方を培ってくれる。時折、解決策が得られても、それだけでは状況を変えるまでに至らないことがある。しかし、そのような状況や困難に立ち向かう私たちの姿勢は変わり、そのために私たちは、さらに豊かな奉仕の機会を的確にとらえることができるようになる。

神は私たちに心をかけ、いつも見守っておられる。しかし、普通の場合、私たちの必要は第三者を通して満たされる。したがって、私たちは互いに奉仕し合うことが大切である。私たちは自己の人生観を高め、他の人々に対する見識を広め、自己の可能性を伸ばしてゆく時に、豊かで満ち足りた人生を送ることができる。このように、キリストの教えに従えば、それだけ私たちは視野を広めることができ、ますます多くの奉仕の機会を見いだして霊的安定を得ることができるのである。言い換えれば、奉仕のないところに靈性はないのである。

当然のことながら、豊かで満ち足りた人生とは物質的なものを得ることだけではない。確かに、物質的にも恵まれ、その富を使って隣人

を助けている素晴らしい人々は大勢いる。しかし、聖典で述べられている豊かな生活とは、他の人々に対する奉仕を増し、私たちの才能を神と人類のために捧げることによってもたらされる霊的な祝福のことである。

私たちの生活が、私たち自身を天父や隣人に近づけるものでなければ、どうしようもない空虚さだけが残ることだろう。今日の多くの生活様式が、家族や友人、仲間たちから私たちを引き離し、ただ快樂と物質のみを飽くことなく追求する原因となっているのがその例である。これは何と驚くべきことであろう。快樂と真実の喜びとの違いは、快樂は他人の苦痛を代償としてのみ得られるが、喜びは無私と奉仕から生み出され、人々を傷つけることなく人々に益をもたらすということである。

このように問題の横溢する世の中であって、他の人々に奉仕するというような簡単なことをどうしてそれも重要視するのかと不思議に思う人もいる。しかし、イエス・キリストの福音は、私たち自身を含め、この地球上に住む人々すべてに対する見方を変え、それによって私たちが真に大切な事柄を見きわめることができるようにするという祝福をもたらすのである。

私たちは人類を変えようとする前に、まず自分自身が変わらなければならない。ある賢人はこう語っている。「人は皆、自己を改善することを忘れて他人のことに干渉し過ぎる。その結果、何ら変わることはない」と。豊かで満ち足りた人生は自分に始まり、次いで他の人々に広がってゆくものである。私たちが豊かさと正義を備えているならば、他の人々の生活を変えることができる。それはちょうど、私たち一人一人が立派な人々のよい感化

を受け、彼らがいなければ得られない豊かさを受けてきたのと同じである。

あなたの人生に最も感化を与えた人を2、3名選んでみていただきたい。人生の苦難に直面した時に彼らから受けた何があなたの支えになるだろうか。彼らはあなたのことを心から心配し、あなたのために時間を割き、あなたにとって必要なことを教えてくれたことがわかるに違いない。

イエスは、人生を豊かで満ち足りたものにするようにと語ると同時に、その豊かさを生み出す福音の基本原理をも示して下さった。人間の苦しみには、戦争、病気、貧困など、数多くの原因がある。中でも最も長く、最も大きな苦痛を伴うのが罪悪すなわち神の戒めに背く行為である。例えば、結婚前の純潔、結婚後の貞節を完全に守らない人には、豊かで満ち足りた人生はあり得ないのである。偽り、盗み、不正を働く人には、高潔や正直の感情は起り得ない。ねたみやむさぼりの気持ちがあっては生活を美しいものとすることができない。両親を敬う気持ちがなければ、生活を真実の意味で豊かにすることはできない。もっと豊かで満ち足りた生活をするために私たちに何ができるかももう少し詳しく知りたければ、まず自分の良心に問いかけていただきたい。たいいていのことは、それで解決できる。

私たちのほとんどは、完全とは程遠い存在である。だからと言って、私たちが完全になることができないとか、完全になる努力をしていないということではない。キリストも、もともと完全ではなかった。しかし、苦難に打ち勝たれた。飢えや渇き、寒暑、苦痛、悲しみと、まさに苦難の連続であった。しかし、

その度にその苦難に打ち勝ち、完全へと近づいていかれたのである。

自由意志を持っている普通の人間ならだれにでも、川の流れに逆らって權をこぎ、新たな活動や思い、発展の翼を広げる力が具わっているはずである。人は自分自身を変えることができる。いや、自分を変えなければならぬのである。

アブラハムもそうであった。彼の家族は偶像を崇拜していた。しかし、アブラハムは真実の生ける神を礼拝する人々のために神権時代を開いた。モーセは貧しい奴隷の境遇の下に生まれた。しかし宮殿で育てられ、多くの素晴らしい機会に恵まれた。そして、人が到達できる最高位にまで上げられ、神と共に歩き、神と語ることができた。

このように自分を変える鍵となるのが克己である。人は皆、自分の生活を振り返り、自己の希望、欲望、熱望を吟味し、それを抑えて生活しなければならない。

人は自分自身を変えることができるし、また変わらなければならない。人は自らの中に、神のようになる属性を宿しているのである。それは大きく成長する可能性を秘めている。どんぐりの実が生長して大木となるように、人は成長して神となるのである。自分を当然あるべき姿にまで引き上げるのは、その人の内に秘められた力である。

環境によって自分の限界を定めてはならない。また、環境から自分の行く末を判断してもならない。ましてや、壁をつくって私たちを牢の中に無理やり閉じ込めるようなことをしてはならないのである。

人が完全を旨ざす時、その出発点はいろいろある。完全な夫になることもできるし、完

全な妻になることもできる。あるいは完全な父親、完全な母親、完全な指導者、完全な僕になることもできる。完全を目指す過程の中で、私たちは自分の生活を変え、どのような環境の下でも悪を善に換えることができるのである。一度にひとつずつ取り組めば、必ず最善の変化がみられるのである。

私たちは永遠の見地から考えて、自分の行動をとるようにすれば、この世における管理はうまくいくであろう。また、人生の目的に関するイエスの教えを深く理解すれば、それだけ私たちがどういう立場にいて、どういう人間であるかという意識もはっきりしてくる。さらに父なる神の特質を受け入れる程度に応じて、私たちは人類の間に兄弟愛を広めてゆくことができるのである。ゲッセマネの園やカルバリの丘でナザレのイエスに起こったことを理解すれば理解するほど、私たちは自分の生活に犠牲や無私の精神がどれほど大切であるかがよくわかることと思う。

最後に申し上げておくが、豊かで満ち足りた人生とは長生きしたとか、何年も生きたとかいった単純なものではない。それは、人生の長さではなく、到達した高さ、質の問題である。ナザレのイエスの贖いのお陰で、私たちは不死不滅の体を受け、永遠に存在できるようになった。しかし、もし私たちがその教えに従わなければ、この世においても来るべき世においても、豊かで満ち足りた人生を送ることはできないのである。

(1977年11月4日、ユタ州オグデン、ウェーバー州立単科大学での説教より抜粋)

# 歴史上の女性たち

1978年6月29日、ノーヴー記念像の  
除幕式における話



**キ**ンボール大管長、ならびに大管長だけでなく私たちが心から愛するカミラ姉妹、およびバーバラ・スミス姉妹、ベル・スバッフオード姉妹、それにイスラエルの母、シオンの娘である皆様。

このように皆様の前でお話する特権にあずかり、みたまの安らぎを得、謙遜な気持ちに満たされております。また、聖きみたまの導きの下に、今この場で主が語らんとすることを語られるようにと願っています。私はきょう、「歴史上の女性たち」というテーマでお話したいと思います。アルマは次のように述べています。

「神は天使によって男ばかりでなく女にも御言葉を伝えたまい、そればかりでなく、またたびたび賢人や博学の人の知識も及ばない御言葉を子供に与えたもう。」(アルマ32：23)

霊的な事柄に関する限り、みたまの賜に関連するすべてのこと、すなわち啓示を受けること、証を得ること、示現を見ること、そのほか聖なること、あるいは義ゆえにもたらされるあらゆることにおいて男と女は主の前にまったく平等な存在であると言えます。主は人をその性によって偏り見ることをせず、主を求め、主に仕え、主の戒めを守る男女を同じようにして下さい。

主は主を畏れるすべての人に恩恵と憐みとを与え、また男女を問わず終わりまで義しくかつ真実に主に仕える人に誉れを与えて下さいます。主が王国のあらゆる隠れたる奥義を知らしめると約束されたのはそのような人々に対してでした。彼らの悟りは天に届き、人の目がいまだ見ず、人の耳がいまだ聞かず、人の心にいまだ思い浮かばないものを彼らは主

から啓示されるのです。(教義と聖約76：5—10参照) これは男性であれ、女性であれ、平等に言えることです。事実、私はいささかのためらいもなく、女性は世の初めから大いなる霊的才能を得てきたと申し上げることができます。

無限の善と知恵とを持ちたもう主は、時の初めから女性を高く評価し、この地上の王国の中で、またこの世における人類の営みの中で、人知では測り知ることのできない方法で女性を重んじ、尊んでこられました。今みたまの導きが得られるならば、ここで啓示と教会歴史に語り継がれてきた女性たちの状態を思い起こしてみたいと思います。

#### 1. 恵まれた処女、マリア

マリアが初めて私たちの前に姿を現わしたのは、ガリラヤのナザレにおいてでした。この時年齢は16歳位で、天上の階級でミカエルに次ぐ第2の天使ガブリエルはマリアにこう告げています。「あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。」(ルカ1：31—32, 35)

マリアはこの世に生を受けた女性の中で最も偉大な者のひとりであり、父なる神の霊の娘であります。

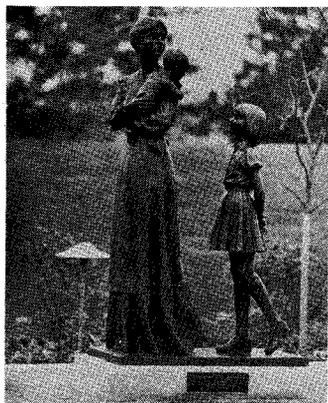
彼女は肉体をもって生まれるべき神の御子に体を与える女性として選ばれたのでした。

マリアは神の御子の誕生の地と定められていた地を目ざして、ガリラヤのナザレからユ

ダヤのベツレヘムへ旅をしました。身重のマリアが長旅の末によく宿屋に着いた姿が目に見えてくるようです。宿屋の中庭には家畜をつなげるようになっていて、中庭を囲む部屋には客が泊まっていました。東洋的なこの宿屋の部屋はすでに満員でした。そこでマリアはヨセフと一緒に、うまやで一夜を過ごすことになりました。その夜、神は御子を世に

送られたのでした。そして天使の歌声が響き、天使の声が聞かれたのです。

マリアは苦難と試練の長い歳月を送ってきました。ヨセフと共にエジプトへ行き、その地の親戚あるいはユダヤ人の友人のところまで世話になったのでした。ナザレに戻ってからも、幼い神の御子に影響を与える母親として、はうこと、歩くこと、話すことなどを教えま



した。「信仰告白」や当時のユダヤ教の戒律も教えました。また結婚の宴を取りしきる立場にあったカナの婚礼では、息子から公の場における初めての奇跡を行なってもらっています。

さらにマリアは、十字架上の息子から、「ごらんなさい。これはあなたの子です」「ごらんなさい。これはあなたの母です」(ヨハネ19:26-27)と、愛弟子ヨハネを紹介されています。この時から、マリアはヨハネの家に引き取られました。

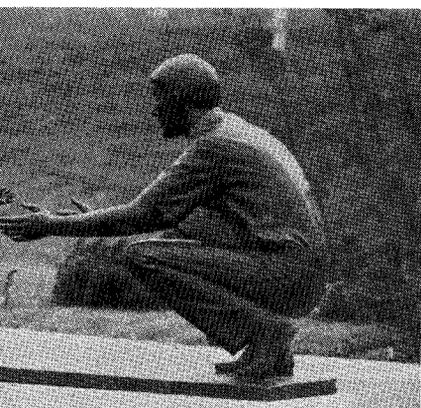
私たちはマリアの中に、敬虔で主のみここ

ろにすべてをゆだねる女性の完璧な模範を見ることが出来ます。

## 2. あらゆる生けるものの母、イヴ

イヴもすべての女性の中で最も偉大な者のひとりであると思います。イヴはあらゆる生けるものの母として、子供を光明と真理の中に育てる模範を示して下さいました。また福音のすべての祝福を受け、みたまの賜を享受し、子孫が同様の祝福を受けられるように備えて下さいました。イヴについて説明するた

めに、ここで思い出していただきたい出来事があります。「アダムとその妻イヴ主の御名を呼びたるに……声聞こえて」きた時、(モーセ5:4)さらにアダムが初めて犠牲を捧げた時に、また天使が現われ、最初の人アダムが立ち上がり子孫に起きる諸々の事柄を予言した時のことを考えて下さい。聖典には次のように記されています。「彼の妻イヴ、すべてこれ



らのことを聞き喜びて言いけるは……」しかもその後には、救いの全計画をまさしく一言で要約した完璧な言葉、説教の極みとも言える言葉が続いています。「もしわれら罪を犯さざりせば、われら子孫を得ざりしならん。また善悪の区別も知らず、われらの贖わる喜びも知らず、すべて従順なる者に神の賜わる永遠の生命も知らざりしならん。」(モーセ5:11)

それから、「アダムとイヴとは神の御名を讃め」と書かれています。ここで注意していただきたいことは、アダムだけでなく、アダム

とイヴのふたりが、「息子娘らにすべての事を知らしめたり」ということです。そして「アダムとその妻イヴとは神を呼ぶことを止めざりき。」(モーセ5:12, 16)

このように、時の初めにすでに、家族を整える完全な模範が示されています。男と女は共に礼拝し、共に子孫を教え、共に永遠に続く家族を築き、そして自ら欲する者すべてが永遠の生命を得られようとして下さったのです。

### 3. イサクが愛したリベカ

どのようなことをすれば女性は家族に良い影響を与えることができるかを告げる啓示の中で、リベカはその最たる女性ではないでしょうか。ある時彼女の身に次のようなことが起こりました。

「イサクは妻が子を産まなかったので、妻のために主に祈り願った。主はその願いを聞かれ、妻リベカはみごもった。」(創世25:21)

男性と女性にはひとつの重要な課題があります。つまり子供を望むことですが、その場合ふたりの一致した信仰がなければなりません。

「ところがその子らが胎内で押し合ったので、リベカは言った、『こんなことでは、わたしはどうなるでしょう』。彼女は行って主に尋ねた。」(創世25:22)

この点をよく注意して下さい。リベカは「イサク、主に尋ねてみて下さい。あなたは族長です。この家の家長ですから」とは言いませんでした。彼女は自ら主に尋ね、答えを得たのです。

「主は彼女に言われた、『二つの国民があな

たの胎内にあり、二つの民があなたの腹から別れて出る。一つの民は他の民よりも強く、兄は弟に仕えるであろう。』（創世25：23）

これはつまり、「リベカよ、主なるわたしはあなたに、今胎内に宿る将来の国民の行く末を告げる」ということでした。

ここで、リベカの生涯からもうひとつの話をしてみたいと思います。「エサウは40歳の時、ヘテびとベエリの娘ユデテとヘテびとエロンの娘バスマテとを妻にめとった。彼女たちはイサクとリベカにとって心の痛みとなった。』（創世26：34—35）

エサウはアブラハムに啓示された永遠の誓約によって結婚せずに、教会外の女性と結婚したのです。主から与えられた正義の標準を守ることも世の中の生き方を選んだのです。そのことが、記録にはこう記されています。

「リベカはイサクに言った、『わたしはヘテびとの娘どものことで、生きているのがいやになりました。もしヤコブがこの地の、あの娘どものようなヘテびとの娘を妻にめとるなら、わたしは生きていて、何になりましょう。』（創世27：46）

言葉を換えて言えば、こういうことです。「もしヤコブがエサウのように教会員でない人と結婚したら、この先の私の人生に何の良いことがあるでしょう。」イサクはこの言葉に勇気づけられ、意を決して自分の責任を果たしたのです。

「イサクはヤコブを呼んで、これを祝福し、命じて言った、『あなたはカナンの娘を妻にめとってはならない。（これは、「教会外の人と結婚してはならない」ということです）

立ってバダンアラムへ行き、あなたの母の

父ベトエルの家に行って、そこであなたの母の兄ラバンの娘を妻にめとりなさい。』

ここでイサクは、父アブラハムの祝福を約束する祝福師の祝福をヤコブに与えたのです。

「全能の神が、あなたを祝福し、多くの子を得させ、かつふえさせて、多くの国民とし、またアブラハムの祝福をあなたと子孫とに与えて、神がアブラハムに授けられたあなたの寄留の地を継がせてくださるように。』（創世28：1—4）

リベカは、実に最も高貴な誉れある女性のひとりでした。

#### 4. ザレパテのやもめ

予言者エリヤ（エライジャ）の時代に、飢えに苦しむザレパテのやもめがいました。エリヤが天を閉じたために、3年半の間、雨も露もありませんでした。主はエリヤに言われました。「立ってシドンに属するザレパテへ行って、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう。」エリヤはザレパテに着くと、そこでたきぎを拾っているやもめを見て声をかけました。「器に水を少し持ってきて、わたしに飲ませてください。」彼女がそうしようとすると、エリヤはまた言いました。「手に一口のパンを持ってきてください。」

それに、やもめはこう返事をしました。

「あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしはたきぎ二、三本を拾い、うちへ帰って、わたしと子供のためにそれを調理し、

それを食べ死のうとしているのです。」

その女性はすぐにも死のうと思っていたのです。しかしエリヤは言いました。

「恐れるにはおよばない。行って、あなたが言ったとおりにしなさい。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持ってきなさい。その後、あなたと、あなたの子供のために作りなさい。

『主が雨を地のおもてに降らす日まで、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない』とイスラエルの神、主が言われるからです。」

やもめの信仰は試され、彼女はその試しを乗り越えたのです。聖典にはこう記されています。

「彼女は行って、エリヤが言ったとおりにした。彼女と彼および彼女の家族は久しく食べた。

主がエリヤによって言われた言葉のように、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかった。」(列王上17章)

名も知られていないこのやもめの生活に、エホバに対する信仰と献身の姿が浮きぼりにされているようです。イエスはナザレで同郷の人々に拒まれた時、郷里の人々の不信仰をこの無名のイスラエル人の信仰と比べて次のように言われました。「よく聞いておきなさい。エリヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土にききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、エリヤはそのうちだれにもつかわされなくて、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた。」(ルカ4：25—26)

## 5. ベタニアのふたりの姉妹

主に愛された姉妹たちの中にマリヤとマルタがいます。このふたりはらい病人シモンの娘たちであったと思われます。シモンがイエスを迎える宴を開いた時に、マリヤは主の頭と足に高価な香油を塗りました。イエスはマリヤとマルタの家でしばしばもてなしや世話を受けています。ある日、マルタが接待につとめていた時に、マリヤはイエスの足もとに座ってみ言葉を聞いていました。そこでマルタはこう言いました。「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください。」すると、主は優しい調子で答えられました。「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである。」

(ルカ10：40—42)

このマルタとマリヤの兄弟が死からよみがえったラザロですが、ふたりはラザロの墓で、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」と言っています。マルタはこうも言っています。「しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています。」ピリポ・カイザリヤ地方の岸辺でペテロと同じような熱意で証をし、主イエスに向かって「あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」と証したのもこのマルタでし

た。(ヨハネ11章)

家事の技術にたけ、篤い信仰を持ち、主に愛されたこの姉妹について、これ以上何も言う必要はないと思います。

## 6. 開かれた墓の前で

福音書の記者たちは、マグダラのマリヤと他の婦人たちが、イエスと十二使徒のガリラヤへの伝道旅行に同伴したことを記しています。この時、ガリラヤに集まった人々は、イエスが次のおっしゃるのを聞きました。「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、そして三日目によみがえるであろう。」(マタイ17:22-23)

この同じ女性たちが、イエスの遺体に香料を塗るために、開かれた墓に来ました。その時にイエスはマグダラのマリヤに現われ、マリヤは復活した人を見た最初の人となったのです。忠実な姉妹たちが墓に来ると、天の使いが現われて言いました。「そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出さない。」

すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえり、と仰せられたではないか。(ルカ24:6-7)

さらにルカはこう記しています。「そこで私たちはその言葉を思い出し、墓から帰って、これらいつさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。」

この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。

彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。」(ルカ24:8-10)

## 7. 近代におけるイスラエルの姉妹たち

現代も昔と何ら変わるところなく、王国の姉妹たちは、霊性、慈善奉仕、真理に対する献身、正義において大きな柱となっています。



また、昔の忠実な姉妹たちと同じように、天父の霊の子供たちに肉体を与え、子供たちを光明と真理の中で育て、主を信じる信仰をもって戒めを守るように教えています。彼女たちの人類に及ぼす影響は、家庭内にとどまらず、広く教会や社会に、また全世界の進歩発展をめざす組織に及んでいます。

予言者ジョセフ・スミスの妻エマに与えられた啓示の中に、この世で主の目的を推進するために妻は何をすればよいか教えられています。主はエマに向かって言われました。「汝の<sup>もつ</sup>天職<sup>つとめ</sup>の任めは、汝の夫なるわが僕

ジョセフ・スミス（二代目）を、苦難の時に慰めの言葉を以て優しき心にていたわるためにあり。……

汝また彼の手により按手聖任されて聖典を積み明し、わが『みたま』によりて受くる所に従い教会員に熱心に説き勧むべし。

彼は按手を施すによりて汝は聖霊を受け、汝の時は記録することと教えを多く学ぶこととに費さるべし。……

彼を夫に持つことと、その夫に来るべき光栄とを汝悦べ。」（教義と聖約25：5，7—8,14）

結婚した女性が働く場は家庭です。妻は家庭で夫を支持し、支えます。次に女性が働く場は教会です。女性は教会で聖典を説き明かし、価値ある記録を書き、多くのことを学びます。女性は教会の内外で、同胞に慈善奉仕をすることもできます。さらに福音を宣べ伝え、伝道することもできます。女性に与えられた召しは、あらゆる場所、あらゆる環境の下で善を行ない、義にいそむことです。

私たちはイスラエルの母やシオンの娘たちの姿を目にしてきました。ハウズミルで泣く女性たち、ミズーリで燃えさかる家の傍らに立つ女性たち、またウインタークォーターズで墓の前に頭を垂れる女性たち。現代の姉妹についても同じことが言えます。彼女たちは家庭の崩壊を助長する不本意な立法案に反対し、立法府に足を運び、投票所に善意の人人の力を結集しています。そして、家族の保護と国家の存続を主に請い願っているのです。

兄弟だけで主の末日の王国を築くことはできません。忠実な姉妹たちはこの世を離れても、大いなるエホバのみ業が晴れて成就する時まで、しいたげられ、霊的に沈んだ人々の

中に入って働き続けるのです。

## 8. 日の光栄の姉妹たち

最後に、日の光栄の安息につくイスラエルの母やシオンの娘たちがいます。彼女たちは皆苦しみに打ち勝ち、大きな苦難を乗り越え、責任をすべて果たし、次のような主のみ声を聞く人々です。「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。」（マタイ25：34）

男も女もひとりではありません。主にあって女なしに男はなく、男なしに女はないのです。これは永遠の原則です。女性は、リベカのように、家族の義の導き手、光となって、より多くの天父の子供たちに救いが与えられるように配慮する責任があります。家族という素晴らしい栄えある制度を与えて下さった神に感動せずにはおられません。この永遠の家族制度こそ、男と女を共に結び、永遠の御父の子供たちに肉体を与え、その子供たちを光明と真理と正義の中で育て、彼らが御父のみ前に再び帰って永遠の生命を受け継ぐことができるように備えをさせるものなのです。

私たちが得ている福音の知識を深め、さらに確かな知識を持ち、男女は共に永遠の父なる神のごとくになり得るとの意識を神の聖きみたまにより心に抱けるとは、何と素晴らしいことではないでしょうか。神がそのような確信を私たち一人一人に与えて下さるように願いつつ、すべてをイエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

## 女性と聖典

「**聖**典を調べなさい。あなたがたは、聖典の中に永遠の命があると思って調べているが、聖典は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ5:39, 欽定訳より和訳)

次のようなことを尋ねられたことはないでしょうか。「女性も男性と同じように、聖典を熱心に学ぶ必要がありますか。なぜ女性も聖典に精通しなければならないのでしょうか? 聖



典を学ぶことは女性にとってどんな意味があるのでしょうか。」

その答えは明白です。主の娘は主の息子と同様に神のみ前にあって貴い存在です。しかも、神より与えられたこの世における女性の役割は、自分自身の救いに関する責任はもとより、夫の助け手として、また子供の導き手として日夜務めることです。この役割を果たすに当たって、聖典をよく学ぶことが必要です。

聖典を読むことを実践している女性は大勢います。しかし、その必要に気づいていない女性が大勢いることもまた事実です。人が自分の知識に基づいた生活しかできないとすれば、すべての母親は教義と聖約68章について知る必要があるでしょう。この章の中で主は両親に、子供が8歳を迎えるまでの間どのように教え導くか、その責任について戒めを与えておられます。母親は子供に、悔い改めの原則をはじめ、生ける神の御子キリストを信じる



信仰、バプテスマ、聖霊の賜を授かる按手礼について教える必要があります。そのほか、祈ることと主のみ前を正しく歩むことも教えないければなりません。(教義と聖約68：25, 28 参照)

ジョージ・アルバート・スミス大管長の母親は、主のみこころをよく知っていた人でした。スミス大管長は、母親から祈ることを教えられた感動的な出来事をこう語っています。「私は祈ることを、末日聖徒である母のひざの上で学んだ。私は母に手を引かれて2階の寝室に連れて行かれたことを覚えている。部屋にはベッドがふたつ置いてあり、そのひと

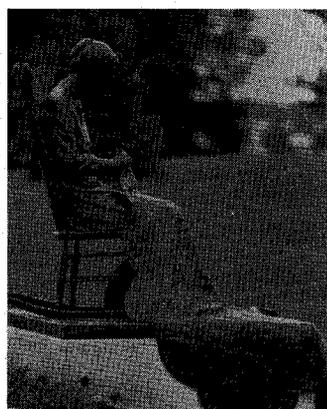
つは両親のベッドであった。また、小さい車付きベッドがその横にあった。私はそのことを昨日のことのようにはっきりと覚えている。母は私を腕に抱いて私の小さいベッドの傍らにひざまずき、私に手を組ませ、それを囲むように自分の手を組んで、初めて祈りというものを見せてくれた。私はそのことを決して忘れないし、忘れたくない。そのことは、私の生涯で最もうるわしい思い出のひとつとなっている。天使のような母は私のベッドの傍らにひざまずいて、私に祈ることを教えてくれたのである。……その祈りにより、私の前に天の窓が開かれ、私は天父のみ手を感じる

ことができました。と言うのも、母が祈ることの意味を小さい私にもわかるように説明してくれたからである。」(Sharing the Gospel with Others「人々と福音を分かち合う」pp.147—48)

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、次のように述べています。「母親はほかのだれよりもその子孫に多大な影響を及ぼすと、私は思う。『その影響はいつから及ぶのですか』という質問を時々受けるが、予言者たちは、『神

のみもとから遣わされた霊が肉体に宿った時からである』と語っている。母親の状態は身ごもっている子供にまで影響を及ぼす。そして、子供の誕生から生涯を通じて、母親の教えと模範はその子供に永遠にわたる影響を及ぼすことだろう。」(The Discourses of Wilford Woodruff「ウィルフォード・ウッドラフの説教集」p.269)

妊娠している多くの女性が自分の体を粗末に扱っている今日、ウッドラフ大管長のこの



言葉は、意味深いものを投げかけています。幻覚剤を常用している母親から生まれた子供は、その母親と同じ禁断症状が現われることが立証されています。子供がまだ体内にいるうちからこれほどの影響を受けるとすれば、誕生し、母親の行ないを見聞し、感じることができるようになった子供に与える母親の影響は計り知れません。神からいただいた務めを自覚し、子供を教え導く備えをしている女性は、霊的な義務を知らない女性と比べてはるかに子供を益することができます。そう明な母親なら、まだ8歳にもならない子供が母親と離れることの重大さを真剣に考えるは

ずです。

だれもが感じていると思いますが、日々誘惑に直面し、それを克服するに当たって、ただ聖書やモルモン経に記された聖句を読むだけでは十分ではありません。女性であっても、この神権時代に予言者に下された聖文から導きと指示を得る必要があるのです。これらの聖文は、見慣れないところや難解な意味の中に隠されているわけではありません。現在使われている日常の言葉の中に見出すことができるのです。

救い主の再臨が近くなるにつれて、サタンは義しい人々を引きずり下ろそうと、たけり

狂っています。末日聖徒の女性たちは、結婚誓約の神聖さと家族の永遠性を心に留めて自らを強める必要があります。そして近代の予言者の言葉に従わなければなりません。

今日の世の中の様々な女性観に不安を覚える女性は、予言者の言葉の中にその解決法を見いだすことでしょう。福音の計画にあって、女性の役割に関する指示は、アダム時代か



ら今日に至るまで変えられたことはありません。女性はそれぞれ、回復された真理に基づいた証を培い養うようにしなければなりません。霊的に成長する時に、女性はすでに定められている女性としての役割を果たす備えができるのです。女性は戒めを守らなければなりません。妻として母として、靈感されたみ言葉に従わなければなりません。そして、戒めにそった生活をするためには、その戒めの何たるかを知らなければならないのです。

聖典は、女性の栄えある行く末について教えています。予言者たちは女性を賞賛しています。ジョセフ・F・スミス大管長の言葉に耳を傾けてみましょう。「女性は弱いものだとかく口にしたがる人々がいる。しかし、私はそのように思わない。肉体的には弱いかも知れない。けれども、霊的、道徳的、宗教的に、また信仰において、強い確信を持っている女性と肩を並べることのできる男性がはたしているだろうか。確かにダニエルはライオンの穴の中にあってもなお信仰を持ち続けた。しかし、息子たちが体をずたずたにひき裂かれるのを見ながら、悪魔のような残忍さをもって考案されたあらゆるごうもんに耐え抜いたのは、ほかならぬ女性である。なぜならば、彼女たちには信仰があり、常に進んで犠牲を捧げ、動じぬこと、神に近いこと、道徳と信仰において男性に比肩する者であったからである。」(Gospel Doctrine「福音の教義」p. 440)

真理を読み、研究し、生活の中で実践する時、女性は祝福され、聖きみたまが彼女の霊に真理をささやくことでしょう。そして彼女の前に開かれた狭くてまっすぐな道が、彼女を永遠の生命へと招くのです。

## 家族の靈性を養う父親

**私**は少年時代に、父に連れられてよく家畜の飼育場に出かけたものである。私の家族は小さな牧場を営み、時折家畜を売って生計を立てていた。

川岸に牛や豚、羊などを放し飼いにする放牧場があった。また、川には欄干のついた橋がかかっており、向こう岸の坂道に続いていた。ちょうどその坂道を登り切ったところに、加工工場がある。したがって、家畜を屠殺する時はこの橋を渡らせ、坂道を登らせなければならない。これは牧童頭にとってなかなか骨の折れる仕事で、知恵を必要とした。彼らは訓練した黒ヤギを羊の群れの中に入れる。そしてその黒ヤギに羊の群れを先導させ、橋を渡って坂道を登らせ、加工工場へと導くのである。群れが工場の入口にきたところでヤギをわきに引き寄せ、羊の群れだけを工場の中へ送り込むという寸法である。

私は父の説明を聞きながら、その光景を眺めていた。父は少し間をおいてから、こう言った。「これを教訓にしなさい。自分はだれに従っているかよく注意することだ。そして、自分はどこに導かれているのかをはっきり知る必要がある。」

私は今でもこの時のことを忘れない。家族を教え導き、靈性を養う父親の責任について

考えるたびに、私は父がどのように理解しやすく、しかも印象深く教え導いてくれたかを思い出す。大切なことを教える機会は、必ずしも計画された通りに巡ってくるわけではない。日々の出来事の中に教育の機会を見いだすことが大切である。

私が父親として学んだ最も重要なことは、子供の成長は私たちが何を教えようとするかではなく、私たち自身がどうするかにかかっているということである。

父親である私には、子供たちが友人との間に築く関係よりもはるかに強い絆を私たち親子の間に築くというチャレンジが課せられている。幼い子供の場合、このことは十代の青少年ほど難しくはないと思う。子供は遊ぶことが好きである。カーペットの上で転がり、くすぐり合い、話をし、おどけた顔をするのはさして難しいことではない。

しかし、子供が10歳を越える頃には、なかなか簡単にはいかなくなってくる。この年齢の子供たちは、一方で両親の愛情と関心を求めながら、他方同年代の仲間とのつながりを強く要望する。そこで私に課せられたチャレンジは、子供たち一人一人と、彼らの仲間よりも強い絆を保つことである。そして、他のいかなるものよりも強く、子供を家族に引き



寄せることである。このような関係を保つことができれば、両親はいつまでも子供により影響を与える教師でいることができる。

そのためには、まず子供たち一人一人と特別な経験をする必要がある。私は少なくとも毎週1回、このような経験をするようにしている。乗馬や魚釣りは息子にはよいが、娘の好みは少し異なる。時には、娘が何をしたいかを知るのに時間がかかることもある。昔のダンスを教えたり、学校や生活のことや現代の若者の行動について話し合ったり、一緒に食事に出かけたりしたことは、私の娘にも好評であった。

大切なのは、あなたの行なっていることがどういう意味合いを持っているかを子供たちによく理解させることである。時には、自分のしたいことを犠牲にして子供と過ごす時間をとろうとしていることを、知ってもらうのも必要である。

私の友人に、父親としても非常に立派な人がいる。彼はこう言っていた。「戦争で最終的に勝利をおさめるには、1、2度負けてみる必要があります」と。私もその通りだと思う。両親は、子供たちが成長し独立して、孫を育てることのできる立派な家庭を築くように望んでいる。しかし、子供たちが両親と異なる決定をせずに、素直にこれを成し遂げるなど、まずもってあり得ないのである。

夫婦の結婚生活には、「キブ・アンド・テイク」の精神が必要である。これは、親子の間でも言えることである。私がいつも悩むのは、どういう時に毅然たる態度を執り、どうい

時に寛大に「過ち」を認めるかということである。子供がしっかりした意見を持ち、しかもその問題が歩み寄る必要のある事柄の場合、少し話し合った後に受け入れるとよいことがある。

どこで引き下がり、どこまで断固たる態度を執ればよいかを知るためには、神の導きが必要である。私は自分の経験からみたまの導きを受けずに、靈的な指導を与えることはできないことを承知している。ブリガム・ヤング大管長は、父親は毎日家庭に聖霊を招き入れるようにしなければならないと教えている。

「父親の皆さん、皆さんの妻が主のみたまの導きを受けて、その影響力にあずかることができるように絶えず祈っていただきたい。幼な子が母親の胎内にいる時から聖霊の力を授かるようにしていただきたい。聖霊と力に満たされて立ち上がる国民の姿を見なければ、そのようにすることが必要である。男女、子供に課せられるそのほかの義務はすべて、その時、その場所にに応じて与えられることだろう。このことを忘れないでいただきたい。主のみ前にあって心を清くし、家族の満足と慰めのために絶えず最善を尽くしていただきたい。そうすれば、家族全員がいつも主のみたまの慰めを享受することができるであろう。もし以上のことを行なわなければ、皆さんの才能が世の人々のそれに勝ることはないであろう。」(*Journal of Discourses*「説教集」1:69)

子供たちと一緒にいる妻が聖霊の影響力を受けられるよう妻のために祈る時に、私は父親としてなすべき自分の務めを一層よく感じ

とることができるようになった。同様に、子供たちに神について話すと同じくらい、子供たちのことを神に話すならば、子供に教えることはますます容易になることを私は知った。

両親はその子供たちに祈ることと、主のみ前を正しく歩むこと、そして安息日を聖く守ることを教えるように命じられている。これ

は回避することのできない責任である。特に、次のふたつの重要な点を心に銘記していただきたい。子供が一度も両親を困らせることなく、あるいは改めるべき点もないままに成長すると期待してはならない。また、両親は子供たちに何の問題もないように見せかけてはならない。偽善は大きな障害になるだけである。

---

父親である私には、子供たちが友人との間に築く関係よりもはるかに強い絆を私たち親子の間に築くというチャレンジが課せられている。

---

父親は善悪の相違を明確に教えることにより、子供たちの靈性を養うことができる。私たちは最善を尽くすならば、必ずや本来の務めを果たせることだろう。

わが子の成功した姿を見ること、これは父親として得る最も大きな報いである。小さな子供たちが家庭の夕べや教会のプログラムで責任を果たすようになるにつれ、子供たちの中に内気なものもいれば、逆に少し出しゃばりな子もいることがわかってきた。しかし、どの子も成功したいと願っている。そこで私の靈的な責任は、子供たちに自信を持たせ、彼らの能力に合った方法で自己を表現できるように助けることであると思う。

私の妻は非常に素晴らしい方法を用いてい

る。妻はよく子供たちを集め、ひとりずつ傍らに呼んで、その子供のために特別なことを話す。すると、子供たちはみな少し恥ずかしそうに顔を赤らめるが、やがてその顔は輝いてくる。妻がそのようにした後は、家庭はきまって明るくなるのである。

父親が家族の靈性を高めるのに有益なもうひとつの方法は、靈性の高い人々から良い感化を受ける機会を与えることである。

家族を教会に連れて行く、子供たちをセミナーに登録させる、学校や教会の教師と子供の目標や成績について話し合う、扶助協会に出席するように妻を励ます、立派な人々を家庭に招待する。これらはすべて家族の必要を満たす方法である。しかし、父親が自分ひ

とりですべてを行なわなければならないと考  
えるのは賢明なことではない。

父親は子供を義しく育てる上であれこれと  
意見を述べることもできるが、何よりも大切  
なのが、良い感化を及ぼす立派な母親を選ぶ  
ことである。父親が子供に与える最大の贈り  
物は母親である。なぜなら、母親は他のいか  
なる力にも増して、子供に大きな感化を及ぼ  
すからである。家庭で義を求め、義を育む母  
親は、絶対に欠くことのできない存在である。

そのほか、父親は妻と気高い関係を保つよ  
うに努力し、自分の気持ちを上手に行動に表  
すことによって家族の靈性を高めることがで  
きる。その際、父親は妻に対してどう感じて  
いるかを子供たちに話したり、妻の希望を尊  
重し、妻の意見を求めたりする。時には友達  
のようになって、妻の興味と関心を（強要で  
はなく）引き出すようにする。そして感謝の  
気持ちを言葉と行ないで表わし、自分が考  
えていることや問題を分かち合う。また妻の関  
心を考慮して自分の計画を立て、妻の愛と証  
に感謝していることを伝えることも必要であ  
る。もし夫が妻のもつ義の心に感謝し、それ  
を尊重することがなければ、妻は家庭の中で  
靈性を維持することはできないであろう。

子供たちに、靈的な観点から生活全体を見  
させるようにすれば、それだけ靈的な糧を子  
供に多く与えることができる。同時に、それ  
によって自分自身の靈性も高められることを、  
私は知った。

イノスの経験を読むと、私は心を励まされ  
る。イノスの靈性を養うように努めた父親の

努力は、直ちに大きな成果を上げたわけでは  
ない。（イノス3参照）時として私たちの努力  
は成果が少なく、無視されたり、あるいは不  
承不承に受け入れられたりすることがある。

## 家を治めるとは

ジョーン・フリンダース

**私** は夫のお陰で沢山の良いものを得ている  
ことを感謝しています。それらは私や子  
供たちの靈性を高める力となっています。こ  
のことは非常に大切なことです。家族の靈性  
は多分に父親の靈性にかかっているからです。  
靈的に強くない夫は、妻や子供を強めること  
はできません。ここで夫がどのようにして私  
たちの靈性を高めているか、例を挙げて説明  
したいと思います。

1. 私たち夫婦は、数年前から、子供たちの  
長所と短所を記録して、2、3カ月に一度  
子供たちと個人面接をしています。

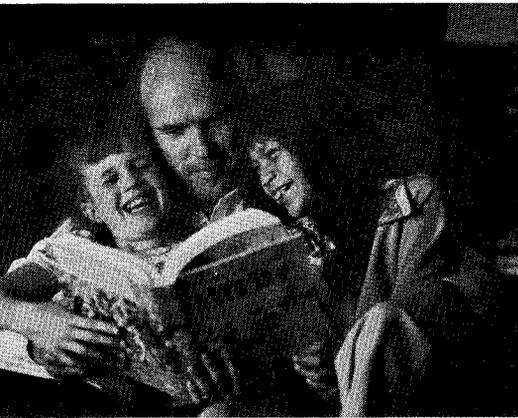
夫は子供たち一人一人のためにバインダ

しかし、私が少年時代にユダという名の黒ヤギから教訓を学んだように、たとえ成果を目にするのにしばらく時間がかかるとしても、投資(努力)したことには必ずそれ相応の報

酬(報い)が得られるのである。

ニール・J・フリンダース

セミナー・インスティテュート管理部記録・  
調査・評価担当ディレクター



一を用意し、左側のページに「短所」、右側のページに「長所」を書くようにしました。

面接の時、これは私たちが子供と接する特別な時間ですが、そこで私たちは子供の長所と短所について話し合います。日付の下に、現在の問題を3人がどのように見ているかを書き、またよくできた事柄を書き出し、さらにこの数週間で良くなった事柄も記録します。子供たちは家庭や家族、友人、あるいは自分の問題などについて自分の気持ちを遠慮なく何でも話します。それに私たちが親として答えるのです。

## 2. 家で7人の子供たちをいつも仲良く働か

せるのはそうたやすいことではありません。しかし、父親と一緒に働くことで子供たちも仕事を愛するようになり、「仕事」が「楽しみ」に変わってきます。夫は自分が子供の頃にした仕事や、喜んで働くことの大切さについてよく話しました。その効果もあったのだと思います。

私たち家族は、毎年春になると総出で畑仕事をします。土ならしに始まり、種まき、散水、除草を全員でします。そして夏や秋には大根を抜いたり、とうもろこしを取り集めたり、いちごを摘んだり、じゃがいもを掘ったりして、子供たちに収穫の楽しさを教えるのです。

夫は機会をとらえて教えるのが上手です。畑仕事にたとえて、伝道や死後の生活への備え、正しい管理や訓練、敵(雑草)を除去することの大切さを話します。私たちは毎日の簡単な仕事の中から、多くのことを学び取ることができます。

3. 家族全員で行なっているもうひとつの重要なことは、夕食後10分か15分ほどの聖典の読書です。現在はモルモン経を読んでいます。順番に読むようにしており、学齢前の子供も自分のモルモン経を持ってきて一

緒に指で追いながら読みます。ときどき「今どこを読んでいるの」と聞かれることがあります。でもおもしろいことに、聖典を読む時間のことを一番先に思い出させてくれるのがそのような小さい子供たちなのです。聖典を読みながら、夫は私たちに霊的な話をしてくれます。黒板に書いたり、身振りを加えたりして話してくれます。これがまた、子供たちになかなか好評です。

4. 断食日曜日は目的を持って断食をすると一層有意義になります。夫は土曜日に断食の目的について話します。また、ワード部の病人や特別な祝福が必要な人のために祈ります。小さな子供たちのために時間を取って一緒に祈り、大きな子供には祈りを毎日しているかどうかときどき尋ねます。

食事や祈りの時にその日の出来事を話し合うようにすると、子供たちの感受性が豊かになり、感謝の気持ちが深まるようです。

5. 父親は神権を行使することによって家族の霊性を高めることができます。父親は自ら模範を示します。父親が喜んで主のみ業に精出している姿を目にすることのできる子供たちは実に恵まれています。夫はいつも特別に時間を取って、毎月私を神殿に連れて行ってくれますが、そのことは家族にとっても大切なことです。このような習慣によって家族全員が非常に良い影響を受けるからです。お陰で私たち夫婦は、第一になすべきことを最優先に行なうことができますし、子供たちも私たちが行なっていることを特別なことであると認めてくれます。子供たちの協力の姿勢からそのことがよく感じられます。また、私たちが神殿に参入することは、子供に神殿結婚の大切さ

を教えることになると思います。

6. 1週間で一番楽しみなのが、家庭の夕べです。私たちは家族で一緒に過ごすこの時間を何よりも心待ちにしています。レッスンやゲーム、歌や経験談を順番に受け持ちますが、管理は必ず夫がします。また夫は、家族全員の状態を考慮して、それを改善する方法を考えます。

家庭の夕べは、家族が互によく知り合い、福音の原則を教え合うのに理想的な場です。私たちは、家庭の夕べを通じて、子供たちの知識を確認します。というのも、私たちの方で福音がよくわかっていると思っても、実際は誤解していることがよくあるからです。例えば、わが家の子供のひとりは大管長と大統領の違いがなかなか理解できませんでした。

以上お話ししてきたことは私たち家族にとってとてもよかったことです。私たち家族によいからと言って、ほかの御家族にもよいとは言えないかもしれませんが、多少は役立てていただけるのではないのでしょうか。私たちは妻として、夫が先頭に立って私たちを導いてくれないことがあったとしても、忍耐して待つ必要があります。そして、夫の立派な点に感謝することが必要です。幸せな結婚生活というのは、証と同じように、絶えず新たなものを積み重ねてこそ、活力のある生き生きとしたものになるのではないのでしょうか。

ジョーン・フリンダース

主婦、初等協会教師

## 妻の再発見



**私**は妻に対する自分の気持ちをなかなか上手に表現することができません。でも、結婚した当初に比べると、はるかに深く彼女を愛しています。信頼し、尊敬し、頼りにし、何よりも彼女を誇りに感じています。

私は結婚後妻についていろいろなことを再発見しました。その発見は今も続いています。

私はこれまで大勢の立派な姉妹たちと話してきましたが、私たち夫婦もかつて経験したような欲求不満を打ち明けられることがよく

あります。その姉妹たちは活発で熱心な教会員で、神権者を敬っており、母親であり主婦であることを感謝し、また夫を信頼している人々です。しかし彼女たちが重い口を開いて異口同音に語るには、ときどき夫や子供が自分の働きを認めてくれないということです。自分でしたいことがあっても、夫や子供たちのしたいことほど重要なことのように思われなくて、つい自分のことをする時間がなくなってしまうと言います。彼女たちは夫を心から愛

していますが、自分にとって一番大切な考えや気持ちや関心事に対して夫があまりにも無頓着なために、夫婦の一致が感じられないでいます。

結婚後しばらくして教会に入った私たちは、主にすべてを捧げて働く教会の指導者の模範に深い感銘を受けました。それから10年ほどの間、私たちはいつも3つか4つの責任を兼任してきました。子供たちも当時ふたりだったのが、新たにふたり増え、今では4人になっています。

私たちは、子供のことと家の中のこと以外はほとんど話し合ったことがありませんでした。その後次第に、私はときどき許可を与えたり、反対したりする以外は、子供たちに関するこの決定権をすべて妻にゆだねるようになりました。家庭の夕べの責任もほとんど妻に預ければなしという始末です。父親としての責任を果たすのを怠り、妻の荷を重くしていたのです。その上、母親である妻を励ますこともしていませんでした。

そのような私の目を覚ましてくれたのが、ポール・H・ダン長老の説教のテープでした。ダン長老はその中で次のような勧告を与えていました。聖典や教会や学問の問題で夫だけが一方的な情報提供者となってはならない。妻にも自分の勉強をし、知識を深め、能力を研ぐ時間と励ましが必要です。私は自分のことを振り返ってはっとしました。

子供たちが福音だけでなく、勉強でも能力をいっぱい伸ばせるように祈ってきました。けれども、妻にもそのような祝福が与えられるようにとは祈ったことがなかったのです。視野を広げることが大切だと言って自分の趣

味や娯楽の時間を取っておきながら、妻の生活のことはまったく考えていなかったことに初めて気付いたのでした。

そこで私はこのことを深く反省し、主に祈りました。そして得られた答えが、マタイによる福音書19章5,6節の聖句でした。そこには、夫と妻は「もはや、ふたりではなく一体である」と書かれています。夫と妻は共に完

---

永遠の結婚とは、

実際のところ

完全な進歩を目ざし

ふたりで助け合って

成長しようと、誓約すること

ではないでしょうか。

---

成を目ざして歩む夫婦でなければならない。私はそう思ったのです。体の一部が飢えを感じれば、体全体が苦しむはずだからです。

そこで私は謙遜な気持ちで家に帰り、そのことを妻に打ち明け、勉強でも趣味でも自分で好きなことをする時間を取るように妻に勧めました。初め、妻は反対しました。大切な責任があるのに、家庭以外のことのために取る時間などないというのです。私たちはその

ことについて話し合い、祈りました。そしてそれから1週間、妻は遠慮しながらも「高価なる真珠」の夜のインスティテュートの授業に登録することにしたのです。

当初の懸念はすぐに一掃されました。妻は意気揚々と帰ってくると、学んだばかりの原則を早速私に話し、レッスンのよかったことを一気にまくし立てるのです。こうして、私たち夫婦の間に、仕事や子供以外の話題が生まれてきました。また週に一晚だけですが、子供の世話を何週間か続けるうちに、妻の有り難さがよく分かるようになりました。その上久しくなかった子供たちとの交流も取り戻すことができたのです。子供たちも妻の変化に気づき、クラスの様子を聞くことを楽しみにするようになりました。このようにして家中幸せに満ちあふれるようになったのです。

その後も、妻はいろいろな通信教育を受け、ついに意を決して長年の夢であった絵画に取り組むようになりました。結婚して20年にもなるというのに、彼女にそのような趣味があることをまったく知りませんでした。こうして日ごとに絵の才能を伸ばしていく妻の姿を見て、私は誇りを感じるようになりました。妻も生活に自信を持つようになり、私たちふたりの関係は一層親密になりました。とりわけ相互の認識が深まっていったことはとてもよかったと思います。

互いに充実した話し合いを持ちながら助け合っている夫婦もいますが、一方には、忙しい夫の様子を見て、夫や子供に比べれば自分のしたいことなど二の次だと感じ、夫に話すことさえためらっている素晴らしい姉妹たちも大勢います。現に私の妻も以前はそうでし

た。

妻がインスティテュートを受け始めると同時に、夫婦の間で聖典や教会についての有意義な話し合いも増えてきたようです。特に意義ある経験をしたのは、セッションを終えた後、神殿の中でふたりで静かに話し合っていた時のことです。妻はそのエンダウメントの儀式で得たことを語り始めました。それを聞きながら、私は妻の言っていることは真実であるという確信を、みたまの証によって得ることができました。あの時の心の一致以上に、ふたりにとって貴重なものではありません。

このような妻の新しい知識はクラスで得られたものではないと思います。それは、彼女が培ってきた自信と興味によって、これまで「自分にはできない」と考えていたところまで祈り考えていくようになった結果だと思えます。そしてこのように妻の霊的な洞察が深まるにつれ、私にも重要な永遠の真理に関する知識が増し加えられてきました。

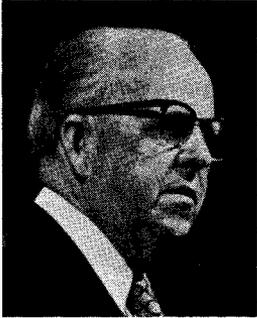
妻を、夫や子供たちのために家事に励む女性としてだけでなく、彼女しかできない才能や働きを持つ一人の人間として認めることによって、私は、夫も妻もそれぞれ、進歩と完成を旨ざすことに精を出す必要があるとはっきり知るようになりました。永遠の結婚とは、実際のところ完全な進歩を旨ざしふたりで助け合って成長しようと、誓約することではないでしょうか。

トーマス・W・ラデー

インスティテュート・ディレクター、ウィスコ  
ンシン・ペロイト・ステーキ部高等評議員

# 質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



七十人第一定員会会長  
フランクリン・D・リチャーズ

「私は教会や他の責任で忙しくて、ほかのことをする時間がありません。けれども、教会で与えられる責任を断わってはいけないと教えられています。どうすればよいでしょうか。」

ニーファイのように、善い父母のもとに生まれた私は、両親から大切なふたつのことを学びました。そのふたつとは、教会の指導者に従うことと、教会で奉仕する機会を決して拒んではならないということです。

この教えはこれまで私の人生に大きな影響を与えてきました。けれども、実のところ、召しを受け入れ、全力を尽くして遂行することが難しかったこともあります。しかし、私の記憶する限り、一度も教会での奉仕を頼まれて断わったことはありません。

確かに、しなければならぬことが多すぎて、自分が望むように行なえずに困っている時に、さらに別の責任に召されることがあります。リチャード・L・エバンズ長老は、ある説教の中で次のように述べています。「いつもわずかな時間しか残されていない。……時には忙しすぎて満たされない気持ちを感じることもあるが……忙しいあまりになぜそんなに忙しいのかを考えようとしないうちがある。」

私たちは多くの重要でない事柄に時間をかけ過ぎてはいないだろうか。そのような不必要な事柄を避けることはできないだろうか。できるだけ簡易化し、本当に重要な事柄を見直すことはできないだろうか。機械的にならずに、単調で無意味な行動をやめて、もう少し活気ある生活はできないだろうか。」

忙し過ぎるからと言って、与えられた責任を断わる前に、エバンズ長老の助言に従ってみることで。つまり簡易化を計り、本当に重要な事柄を見直すことです。もう一度自分の優先順位を検討してみて、神の王国を建設するためにあなたの時間と才能と財産を惜し

みなく主に捧げる約束を交わしたことを思い出して下さい。

最優先すべきことを第一に行ない、不必要な活動を削除して生活を簡易化すれば、教会の責任を引き受ける時間ができるはずで。もし祈りをもって慎重に考えても決めかねる時は、その責任について教会の指導者とさらに話し合ってみた方がよいでしょう。

次に、与えられる教会の召しに自分はふさわしくないと感じて、恐れのお気持ちから断わってしまうことがよくあります。私は、人生とは自分では十分に準備ができていない責任の繰り返しであると考えています。責任を引き受けて果たすならば、主は私たちの能力を超えた知恵を授けて下さり、私たちは自分の力以上のことを成し遂げることができるのです。このように、私たちは過去の自分の限界を乗り越えなければならない状態に置かれた時に大きく成長するのです。

これは私の意見ですが、一般に忙し過ぎるとか、準備ができていないとかいうことは、神の王国の建設に携わる機会を拒む正統な理由にならないと思います。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べています。「私が信条としているのは、主が命じられたことは必ず行なうということです。」(History of the Church「教会歴史」2:170)

主は権能を託された僕を通して私たちに勧告を与えられます。ですから、私がお勧めするのは、教会の指導者に従い、決して奉仕する機会を拒まないようにということです。そうすれば、人々の生活に変化をもたらすだけでなく、自分自身の生活も大きく変わってくるはずで。そして、喜び、幸福、満足、成長、それに進歩を味わうことができるでしょう。私はこれらのことを心から証します。



ユタ大学心理学部教授  
ビクター・B・クライン

「福音の原則に従うためであれば、  
両親に背いてもよいでしょうか。」

きわめてまれな例ですが、親が息子や娘に明らかな悪事や反社会的行為、自殺などを強要あるいは命令する場合があります。そのような出来事を耳にする時、私はブリガム・ヤング大管長が教会の姉妹たちに与えた次の勧告を思い出します。「女性は夫を支持し敬う必要があるが、地獄までつき従って行っはならない」と。

両親のどちらか一方が明らかに福音の標準に反することをするように求めた場合、子供はまずもうひとりの親に相談して助けを求めた方がよいと思います。しかし、健全で愛に満ちた両親が一緒になって子供に悪事や不正行為を強要するなどということは考えられません。そのような例は、精神病や中毒患者の中にしか見られないことだからです。そのよ

うな状態には、当然子供たちも気づくはずで  
す。親が教会員でない家庭では、安息日の戒  
めを破って日曜日に働くこと、什分の一を納  
めないこと、禁じられている飲料を飲むこと、  
そのほか福音の原則に反する行為を求めるこ  
とがあります。しかし、霊の律法だけでなく、  
俗世の律法から見ても、両親は子供の保護者  
であり、子供を扶養する責任を負っています。  
ですから、真っ向から反抗しても問題の解決  
にはなりません。私が若い人々に提案するこ  
とは、賢明な方法を用いて、教会の標準に従  
って生活する許可を得ることです。クリスチ  
ャンらしく、穏やかに話し合っ問題解決  
して下さい。戒めをよく守っていれば、断食  
と祈りによって個人の啓示を受け、だれもが  
納得する建設的な方法で両親との問題を解決  
できるはずです。それでも問題や争いが残る  
場合、私ならば、その解決方法について監督  
に助言を求めるでしょう。

私の知っているある女性は、教会に不活発  
な長老を夫に持っていました。彼女は夫が什  
分の一を納めないことを口うるさく言ってい  
ました。「あなたが什分の一を納めなければ、  
この戒めのもたらす祝福を私や子供たちも受

けられないことになるのよ。……あなたは祝  
福が欲しくないかもしれない。でも、私はそ  
の祝福を欲しいの。」彼女は何かと怒ることが  
多くなり、この問題が原因で結婚生活も危う  
くなりました。そこで監督のところへ行き、  
夫に什分の一を納めさせるのを手伝って欲し  
いと言いました。監督は次のように答えまし  
た。「あなたの御主人は根が善良で義しい方  
です。たとえ今は什分の一を納めていなく  
ても、御主人を支持して下さい。そうすれ  
ば、主はあなたを認めて下さるでしょう。神  
の戒めに従えば、あなたはいかなる祝福を  
失うこともないでしょう。」後日、その夫は  
監督が助言した事柄を耳にして心を動かされ、  
次第に教会の活動にも集うようになりました。  
そして夫婦の関係も改善されたのです。

このように、私たちは時折ある戒めを守る  
ことを一時延ばすことにより、さらに大切な  
戒めを守る道を切り開くことがあります。(こ  
の質問にあるような)微妙な立場に置かれて、  
取るべき行動や方法を決めなければならない  
場合、次のように自問するとよいでしょう。

「キリストならば、このような場合、どうな  
さるだろうか」と。

## 心の糧

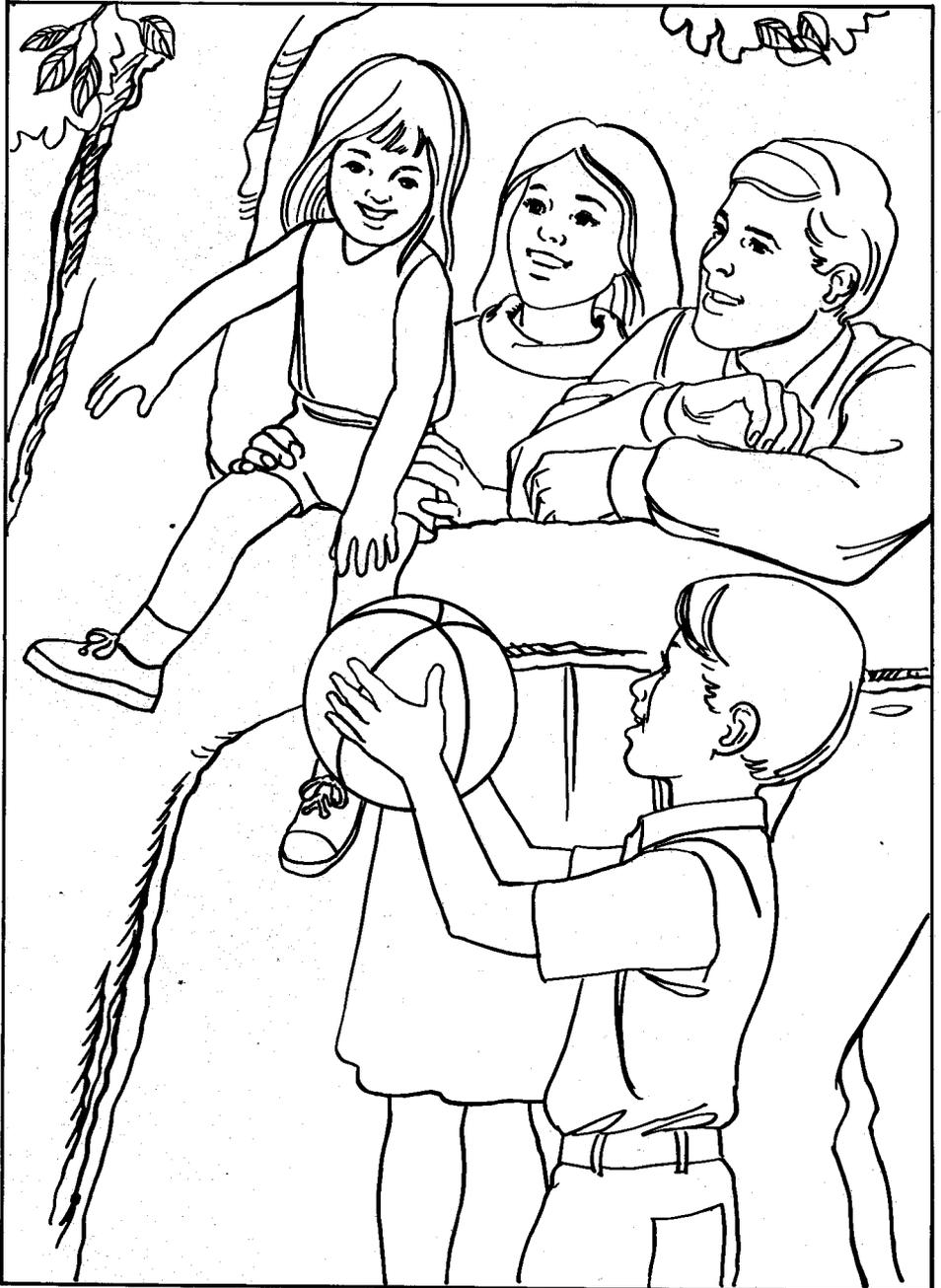
## 聖餐

聖餐にあずかるに先立って、私たちの心は清くなければならない。手  
も同様である。私たちは人に対するあらゆる悪意を捨て、同胞と和解し  
なければならない。そして、御父のみこころを行ない、すべての戒めを  
守るという望みを心に抱かなければならない。そのようにするならば、  
聖餐にあずかることは私たちにとって祝福となり、霊的成長を促す機会  
となるであろう。

ジョージ・アルバート・スミス



# ぬりえ





しちじゅうにんだいいちていいんかいかいじん  
七十人第一定員会会員

マリオン・D・ハンクス

ちい  
小さな  
とも  
お友だちへ

夕ヒチというしまに行ったときのこ  
とを、お話ししましょう。わたしは、  
フィジーや、サモアや、トンガや、  
ハワイや、タヒチの教会のしどうしゃ、  
ユタから来たしどうしゃといっしょに  
バスにのって、出かけました。すごい  
雨の日でした。バスのてんじょうから  
も、まどからも雨が入ってきました。  
また、ゆか下からは、はいきガスが入  
ってきます。みんな、気分がわるくな  
ってきました。おなかがいたくなつた  
人もいました。水があふれて川のように



になった道のとちゅうで、立ちおうじようしている車を、たくさん見かけました。

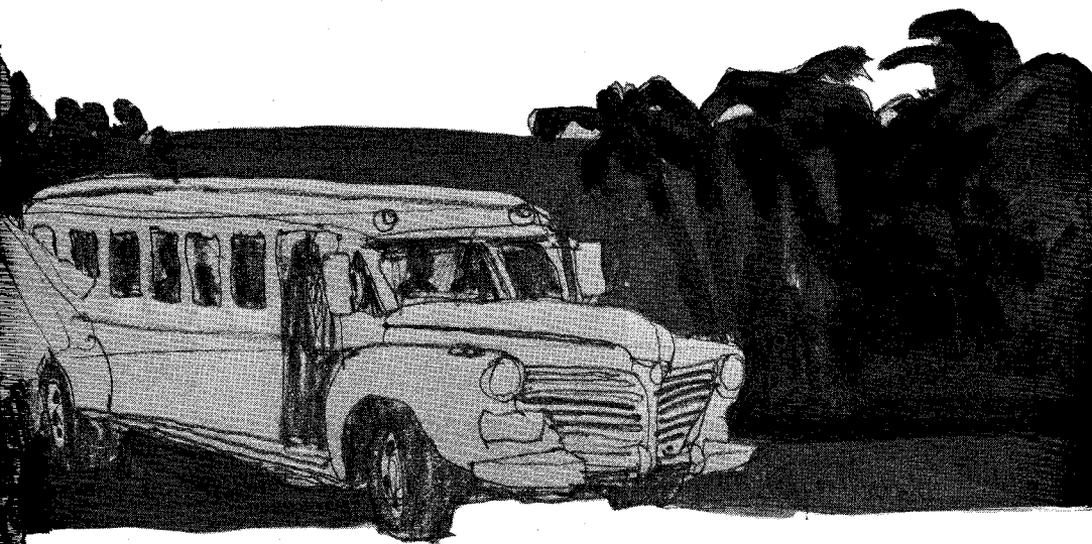
わたしたちは、でんどうぶちょうの大会に行くのとちゅうでした。けれども、行けるかどうか、とてもしんぱいでした。そのとき、だれかが歌いはじめました。みんなも、すぐそれにつづきました。しばらくの間、よく知っているさんびかや、歌を歌いました。わたしは、初等協会でならった歌を歌いはじめました。すると、みんなも歌いました。わたしはとてもびっくりしました。しまで生まれた人たちがばかりでしたが、みんな初等協会の歌を知っていたから

です。

さいごに、心をこめて「わたしは神の子」を歌いました。雨の夜のことで、道には人はあまりいませんでしたが、はじめはめずらしそうに聞いていた道ばたの人たちや、バスのうんてんしゅさんも、やがて、わたしたちの歌を聞きながら、にこにこわらいだしました。

初等協会には、たのしい思い出がたくさんあります。すばらしいことを学び、すばらしい友だちや先生に会いました。

みなさんも、初等協会でのたのしい思い出をつくってください。



しずかな昼<sup>ひる</sup>のことです。「かじだ、かじだ」というさけび<sup>ごえ</sup>声<sup>ねん</sup>が、ノーブ<sup>ま</sup>一の町<sup>ち</sup>にひびきました。1846年2月9日<sup>か</sup>のことです。

11さいのオーレリア・スペンサーは、そのときちょうどしんでんのちかくにいて、男<sup>おとこ</sup>の人<sup>ひと</sup>たちがしんでんから、たすけをよんでいるのを見<sup>み</sup>ました。教会<sup>きょうかい</sup>の会<sup>かい</sup>いんたちは、みんな、ユタへ行くじゅんびをしていましたが、しんでんがかじだ<sup>き</sup>と聞<sup>き</sup>くと、しごとをほうり出<sup>だ</sup>して、かけつけてきました。

そして、女<sup>おんな</sup>の人<sup>ひと</sup>も子<sup>こ</sup>どもも、バケツ<sup>みず</sup>に水<sup>みず</sup>をくみに行<sup>い</sup>きました。男<sup>おとこ</sup>の人<sup>ひと</sup>たちはかいだんに2れつにならんで、水<sup>みず</sup>の入<sup>い</sup>ったバケツをリレーして火元<sup>ひもと</sup>まではこび、からになったバケツを、またリレーでかえました。オーレリアも、一生<sup>いっしょう</sup>けんめいに、水<sup>みず</sup>をはこびました。けれども、いどはすぐにからになり、こんどは、馬<sup>うま</sup>で川<sup>かわ</sup>に水<sup>みず</sup>をくみに行<sup>い</sup>きました。

そのとき、川<sup>かわ</sup>で、べつのじけんがおこりました。川<sup>かわ</sup>に水<sup>みず</sup>をくみに行<sup>い</sup>った人<sup>ひと</sup>がおぼれたのです。けれども、どうにか、30分<sup>ふんご</sup>後に、しんでんのかじは、おさまりました。

しょうぼうしだったホセア・スタウ

きょうだい はなし  
ト兄弟<sup>きょうだい</sup>の話<sup>はなし</sup>によれば、しんでんのやねうらの3.5メートル四方<sup>しほう</sup>がやけたそうです。かじのげんいんは、やねうらべやをとおっているストーブのえんとつのそばで、かわかそうとしていたようふくがもえだしたということです。

火<sup>ひ</sup>がかんぜんにきえたとき、オーレリアは、大<sup>おお</sup>よろこびで、みんなといっしょに、「ホザナ」とさけびました。

じゅうに  
十二<sup>じゅうに</sup>しとひょうぎいん会<sup>かい</sup>のブリガム・ヤング<sup>ちやうろう</sup>長老<sup>ちやうろう</sup>は、ずっと遠<sup>とお</sup>くからけむり



しんでんが  
かじだ!

おはなし：  
スーザン・A・マドセン

を見ていましたが、みんなが火をけし止めたところへ、やってきました。ノブーの音楽おんがくたいは、やねにのぼって、えんそうしました。大ぜいの人たちが、下したできいていました。

オーレリアは、かじをけすてつだいができてよかった、と思おもいました。火

をけすことができなければ、みんなのたいせつなしんでんが、なくなっていたかもしれないのです。

オーレリアは、おとなになってから、こう書かいています。「わたしは子どもだったので、しょうぼうのしきをする人たちが、ちつじょただ正しく、おちついて、しょうぼうのしごとをしていることがわかりませんでした。」

オーレリアはおとなになって、初等しょうとう協きょうかい会のさいしよかいちようの会長になりました。



# たねまきのたとえ話 ばなし



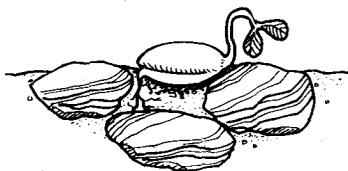
おはなし：ナオミ・W・ランドール

ある日、イエスキリストは、ガリラヤの海で、舟の中からきしにいる人びとに、たとえ話を話されました。



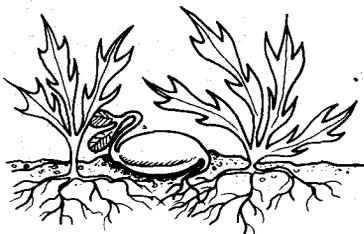
ある日、たねまきが、たねをいっぱいもって、はたけに行きました。そして、たねをまきはじめました。

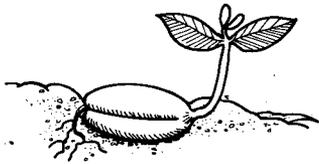
あるたねは道ばたにおち、めが出ないうちに、鳥が来て食べてしまいました。



石の上におちたたねもありました。そのたねは、めは出ましたが、ねをはることができないので、すぐにかれてしまいました。

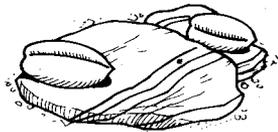
また、あるたねは、いばらのしげったところにおちて、めを出しました。けれども、いばらがのびて、小さなめは、大きくなれませんでした。





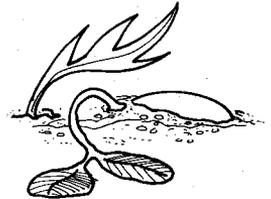
ほかのたねは、よい土の上におちました。  
まもなくめを出し、ねをはりました。雨がふり、お日さまがてり、めはすくすくとそだちました。やがて大きなかぶになり、実がいっぱいになりました。

かり入れの時<sup>とき</sup>が来て、たねまきは、またはたけに行きました。そして、たくさんのみをとり入れました。ひとつのたねから、あるものは30、あるものは60、あるものは100のみがとれました。



弟子<sup>でし</sup>たちはイエスさまに、この話<sup>はなし</sup>はどういうみですか、とたずねました。

イエスさまは、たねまきは福音<sup>ふくいん</sup>を教える人<sup>ひと</sup>で、土<sup>つち</sup>は教<sup>おし</sup>えを聞<sup>き</sup>く人<sup>ひと</sup>ですとおっしゃいました。たねがおちてもめが出ない石<sup>いし</sup>は、福音<sup>ふくいん</sup>を聞<sup>き</sup>かない人<sup>ひと</sup>や、聞<sup>き</sup>いてもすぐわすれる人<sup>ひと</sup>のこ<sup>み</sup>とです。道<sup>みち</sup>ばたのかたい土<sup>つち</sup>は、イエスさまの教<sup>おし</sup>えを聞<sup>き</sup>いてもまもらない人<sup>ひと</sup>です。いばらのはえた土<sup>つち</sup>は、福音<sup>ふくいん</sup>を聞<sup>き</sup>いても、お金<sup>かね</sup>のほうをたいせつにする人<sup>ひと</sup>のこ<sup>み</sup>とです。

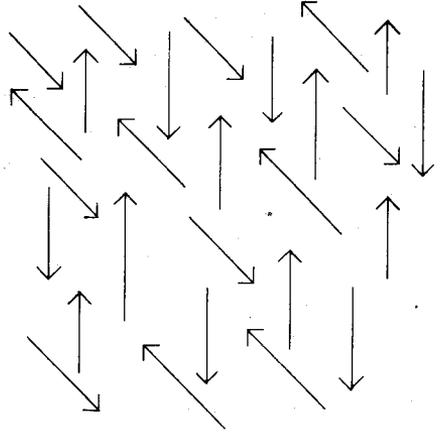
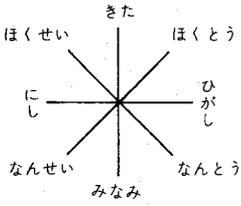


よい土<sup>つち</sup>は、そうです、福音<sup>ふくいん</sup>を聞<sup>き</sup>いてよくまもる人<sup>ひと</sup>のこ<sup>み</sup>とです。



たとえ話<sup>はなし</sup>は、とてもわかりやすいですね。

# おもちゃばこ



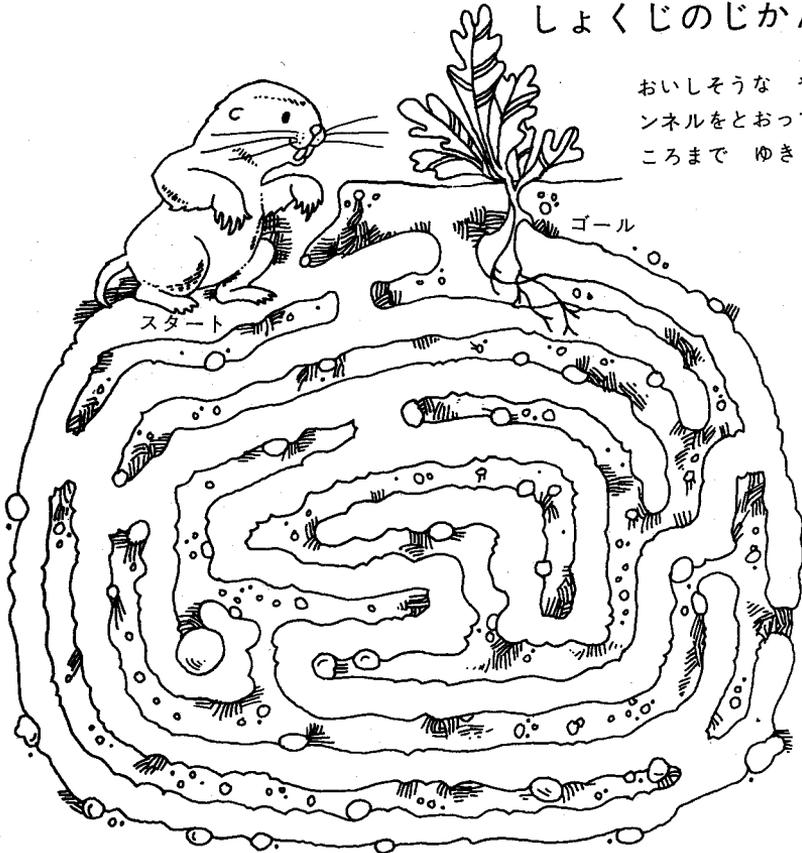
## やじるし

みぎのやじるしで、きた、みなみ、なんとう、ほくせいのほうこうをさしているのは、それぞれなんぼんあるでしょうか。

(9いす) 1' 2' 3' 4' 5' 6' 7' 8' 9' 10' 11' 12' 13' 14' 15' 16' 17' 18' 19' 20' 21' 22' 23' 24' 25' 26' 27' 28' 29' 30' 31' 32' 33' 34' 35' 36' 37' 38' 39' 40' 41' 42' 43' 44' 45' 46' 47' 48' 49' 50' 51' 52' 53' 54' 55' 56' 57' 58' 59' 60' 61' 62' 63' 64' 65' 66' 67' 68' 69' 70' 71' 72' 73' 74' 75' 76' 77' 78' 79' 80' 81' 82' 83' 84' 85' 86' 87' 88' 89' 90' 91' 92' 93' 94' 95' 96' 97' 98' 99' 100'

## しよくじのじかんです

おいしそうな やさいです。トンネルをとおって、やさいのところまで ゆきましょう。





# 愛の報い

レアード・ロバーツ

---

この話は家族の系図記録に記されていた  
実話を小説風に編集したものです。

---

クリスチャン・モンソンの手にする薄暗いランタンの明りが、ノルウェーのフレドリックスタット刑務所のくすんだ石壁に暗い影を投げ、影はゆらゆらとゆれていた。クリスチャンは刑務所の事務室から地下の監房に通じる重い樫の扉の前で立ち止まった。心臓が高鳴っていた。ふたりの囚人を監房から外に出す計画がばればば、自分がこの刑務所に入れられるということはわかっていた。

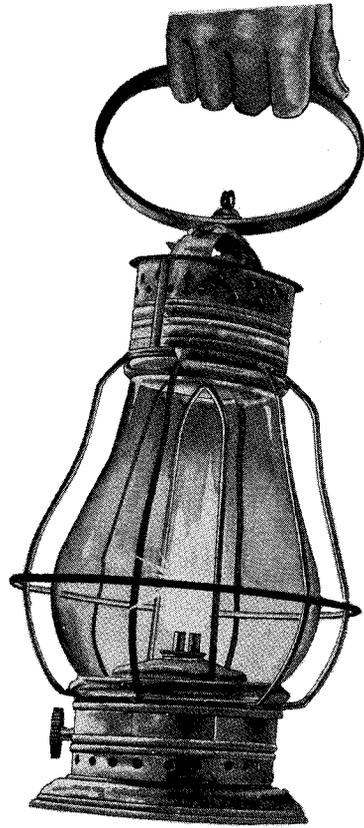
看守の鍵束のひんやりとした感触に、もはやあとには引けない決心の重みを感じた。彼は深く息を吸い込んで、鍵穴に鍵を差し込み、ゆっくりと回した。かちっという金属音が辺りに響いた。クリスチャンはもう一方の手で扉を引っ張った。監房から流れ出る空気は、男たちの体臭と地下室のかび臭さが混じり、湿っぽく異様であった。

彼は所長から夜警をまかされた監房へ続く石段をしのび足で下りて行った。石段を下りきったところで、ランタンを壁のくぎにかけた。明りは闇の中にクリスチャンの顔を明るく照らし出した。青い瞳と真直ぐに伸びた黄褐色の髪をした、背の高い14歳のノルウェー少年である。色白でつやのある顔には普段なら茶目気たっぷりに笑いが絶えないはずだが、揺れるランタンの明りに照らし出されたきょうの顔は少しこぼり、真剣そのものだった。

クリスチャンは廊下を突っきって左奥の独房へ行くと、錠前に鍵を差し込み扉を開けた。

「長老たち！」声をひそめて叫んだ。明りが扉のそばに立って待っていたふたりの男を照らした。ふたりとも無精ひげに長髪で、しかも油と泥にまみれて真黒である。青白い顔には赤あざができ、あばたになっていた。服は汚れ、湿気のためにぼろぼろであった。

クリスチャンは刑務所で働いている間に、ぼろぼろの汚れた服を着て、冷ややかでうつろな目をした男たちを大勢見てきた。しかしこのふたりは憎悪に満ちたほかの者とは違っていた。服装や髪や肌は他の男たちと何ら変わらなかったが、目がどことなく違っていた。



ふたりの目は温かく、生き生きと燃えていた。

ハンソン長老はにっこりほほえんで、クリスチャンの肩に手を置いた。

「天のお父様は君の勇気をきっと喜んでおられると思うよ、クリスチャン。」

「さあ、急いだ方がいい。」もうひとりのネルソン長老が監房から出ながら言った。「しかし、まず祈ろう。」

数分後、クリスチャンとモルモン長老たちは刑務所の外へ出た。背が高く厚い胸をしたハンソン長老は立ち止まると、両腕を伸ばして大きく深呼吸をし、すがすがしい夜の冷気を胸いっぱい吸い込んだ。

彼らは歩きながら小声で話した。フィヨルド（北欧の海岸に見られる細長く入り組んだ

狭湾)に突き出た細い道にさしかかった。

「モンソン兄弟、ご両親はどうされるつもりですか。」ネルソン長老が尋ねた。

「さあ、ぼくわかりません。母に話してみたいのですが聞いてくれませんでした。父はプライドの高い人で、ノルウェーに誇りを感じています。ルーテル教会のことも、自分の信念も変えるような人ではありません。母は理解してくれるかもしれませんが、父はまずだめだと思えます。」

クリスチャンは立ち止まってネルソン長老の方を向いた。吐く息が闇に白く残った。

「教会の真理を受け入れることは苦しいことなんですね、ネルソン長老。」こう言って、クリスチャンは歩き始めた。

ネルソン長老はうなずき、寒さを防ぐようにコートの前を立てた。問題はよくわかっていて。彼とハンソン長老が刑務所に入れられたのも、人々の心がかたくななためであった。

クリスチャンが沈黙を破って言った。

「何年も前、ぼくがまだほんの小さな子供の頃、祖父は、人生には自分の将来や子孫の将来まで変えるような試練の時があるって教えてくれました。そして、その時には、どんなに難しそうに見えても、自分で正しいと思う方向へ慎重に第一歩を踏み出しなさいと言われてました。ぼく、その通りだと思んです。」

彼らは海岸に着くと、岸沿いに小さな入江まで歩いた。海岸線は岩がごつごつ出ていて磯の匂いがしていた。

海に入ってみると、海水は夜の空気よりも温かく感じられた。波が岸辺の岩に打ちつけ、静かでリズムカルに音楽を奏でていた。

クリスチャンはこの2カ月間、自分の教会の教理を調べ、聖書やふたりの長老の教えと比べて勉強してみた。そして祈り求めていた答えを得た時に、心の奥底に温かいものを感じたのであった。平安な気持ちに心が洗われる思いがして、決断の重さに、それまで感じていた苦痛もいつの間にか和らいでいた。

月明かりの中で、ハンソン長老が片手を直

角に上げた。クリスチャンの脳裏には、ヨルダン川に立つバプテスマのヨハネとキリストの姿が見え、人は葬られても再びキリストによりよみがえるというパウロの言葉が聞こえてきた。それからハンソン長老の述べるバプテスマの祈りが耳に入ってきて、祈りの力を感じた。と思うと同時に、体は水中に沈められた。

水平線のかなたから、金色の光が射し始める頃には、ふたりの長老はすでに監房に戻り、クリスチャンは正面の事務室の机に座って昼間勤務の看守との交代を待っていた。朝の静けさの中で、クリスチャンはこれから自分はどういう方向に進むのだろうか、両親にどのように話したらよいだろうかと考えていた。

それから1週間が過ぎたが、秘密は漏れなかった。その後もクリスチャンはルーテル教会に通い、いつも最後列の腰掛けに同年代の少年たちと一緒に座っていた。堅信礼の日、両親は礼拝堂の中ほど、前列の、堅信礼を受ける子の両親のために設けられた席に座っていた。ルーテル教会では14歳になると一人前の信徒になることができ、堅信礼の日には人人の面前で牧師からルーテル教会の教理について質問されることになっている。

クリスチャンは、自分の信念を偽ることはできない、真実を語らなければならないと考えていた。

ついに彼の番が来た。クリスチャンは椅子から立ち上がると、牧師の前へ歩み出た。父は誇らしげにほほえんでいる。クリスチャンは足がすくむのを感じ、心が動揺してきた。教会はいっぱいで、みんなの目が彼に注がれていた。

高らかにうたいあげる、牧師の声が礼拝堂に響き渡った。

「あなたは神を信じますか。」

「はい。」クリスチャンは弱しく答えた。彼は小聲で祈りをつぶやいていた。

「神はどういう御方ですか。」

広い礼拝堂がしんと静まり返った。クリ

スチャンは、世界中の人々が耳をそばだてて彼に注目しているように感じた。その時、体の中に力が湧いてきた。そこで、クリスチャンは力強く、はっきりした声で答えた。

「神は体や手足や感情のない御方ではありません。至高の王座にじっと座しておられる御方でもありません。神は優しく、善なる御方であり、祈りを聞き、祈りに答えて下さる天の御父です。人間は神のかたちにかたどって造られました。」

ここで牧師は初めて顔を上げ、驚いたように目を大きく見開いて質問を続けた。クリスチャンは振り向いて父を見た。父は石のように固い顔をしてじっと彼を見ていた。

牧師は質問を続け、クリスチャンは自分の信念に従って答えた。

牧師は教理問答を終えると、クリスチャンの顔をじっと見つめて、軽蔑したように「モルモンのような返答だね」と言った。

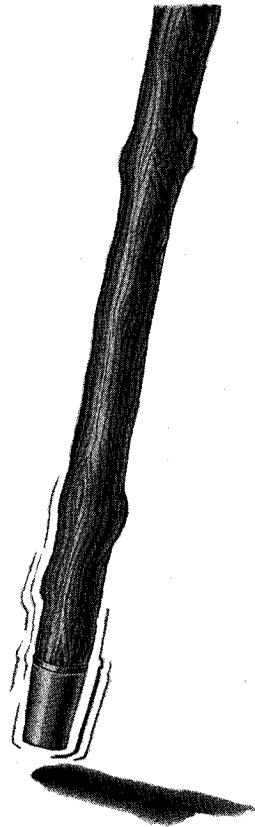
「もしそうだとしたら、うれしいです。」クリスチャンは答えた。

父親のハンス・モンソンは立ち上がると、怒りの眼でクリスチャンをにらみつけ、樫のステッキで床をどんと突いた。そしてきびすを返し、ステッキの音を響かせながら建物の外へ出て行った。

その夜、クリスチャンは数日前から予期していた通り、父親に殴られた。その後数日間は母のお陰でなんとか父と顔を合わせずにすんだ。しかしある晩、クリスチャンがたきぎを家に運び込んで暖炉のそばに積み上げていると、父が部屋に入ってきた。

身のすくむような沈黙の一瞬であった。次の瞬間、木こりで鍛えた堂々たる体のハンス・モンソンが、さっとステッキを振り上げ、息子を打ってきた。クリスチャンは何度か振り下ろされるステッキを避けたが、それでも避けきれずに打たれた箇所はみみずばれになった。

ハンス・モンソンは息を切らしてその手を止めたが、筋肉はひきつり、金髪はすっかり



汗に濡れていた。クリスチャンは今にも気絶しそうな青ざめた顔でその場に立っていた。

「父さん、父さんに従わないのは悪いと思います。ごめんなさい。でも、ほくは自分のしたことを間違っているとは思いません。正しかっただと思っています。福音のために、真理のために殴られるのならちっとも怖くありません。」

ハンスは、はあはあ言いながら暖炉のわきから大きなたきぎをつかんで投げつけた。そしてそこにあったたきぎをみんな投げ終えると、戸を開けて、クリスチャンに出て行けと言った。

「モルモンの悪党などのいる部屋はない。」ハンスは出て行くクリスチャンをどなりつけ、

戸をびしゃりと閉めた。これが、クリスチャンが見た最後の父の姿であった。

夜の外気は身を切る寒さであった。クリスチャンは痛みと混乱のため力がなくなり、虚脱感に襲われた。それでも、父を愛し、尊敬していることに変わりはなかった。そして納屋に転がり込むと、麦わらの山に倒れた。

その夜遅く、クリスチャンはふと柔らかい手が肩に触れるのを感じた。母がそばに立っていた。

「なぜなの。なぜあんなことをしたの。クリスチャン。」母の声は涙にふるえていた。

「ぼく、勉強しました。そして祈って、それが真実だってわかったんです。」クリスチャンは答えながら、自分の言葉に力を感じた。

「母さんに何度も話そうとしたけど、母さんは聞いてくれなかった。真実だとわかっているのに、それを否定することなんてできません。そうすれば、キリストを否定することと同じでしょう。どんなに傷つけられても、キリストを拒むことなど、ぼくにはとてもできないんです。」

寒々としたかび臭い暗い納屋の中で、ふたりは東の空が白むまで語り合った。クリスチャンは母とのかつてなく強い絆を感じた。このことは彼の生涯で忘れることのできない思い出となり、いつまでも彼の心を温め、力を与えてくれるのである。薄暗い光の中で、母のほおには涙が光っていた。母はこの世では2度と生きて会うことはあるまいと思い、クリスチャンを固く抱きしめた。

それから、ずっと立ち上がり、家に入って行った。クリスチャンは母が置いていった弁当包みを持ち、ドラメン市に向かって歩き出した。長老たちが、その町にはほかのモルモン教徒がいると話していたからである。路上に紛雪がちらちら舞い下りていた。

数週間歩き続け、お金も使い果たし、食べ物乞わねばならなくなった。夜は森の倒木にもたれ、コートのを立て身を縮めて眠った。生まれて初めて知る孤独と寒さであった。

寂しさは空腹よりも心を刺した。

ようやくドラメン市にたどり着いたが職もなく、モルモン教徒を尋ねてもだれも知らず、ましてや彼らを捜してくれる人もいなかった。数日間は職とモルモンの手掛かりを求めて家の戸を叩いて歩いた。しかし次第に失望の陰が広がってきた。

ある夕方、吹きつける雪嵐に仮の宿を捜していたクリスチャンは、ドラメン市のはずれの森に小さな小屋を見つけた。そこで意を決して、その家の戸を叩いてみた。すると婦人が出て来たので、職を捜していることを告げた。彼女はにっこり笑って、今夫は不在なので、また後で来てほしいと答え、クリスチャンにパンとチーズを出してくれた。クリスチャンはそれを食べてから婦人に礼を言い、森に帰って行った。たそがれの闇の中で、クリスチャンは雪をかぶったしばの木の間隙を見つけ、そこにもぐり込んだ。鼻と指先は寒さでかじかみ、心は絶望に沈んだ。

クリスチャンは先程女性に会ったことで母をなつかしく思い出し、家に帰りたいと思った。意識がおぼろげになり、眠気が襲ってきた。しかし、このまま眠れば凍えてしまう。一瞬絶望に身をまかせて心地良い暖かな眠りにつこうとした時彼は祖父の言葉を思い出した。

「人生には自分の将来や子孫の将来まで変えるような試練の時がある。その時には、どんなに難しそうに見えても、自分で正しいと思う方向へ慎重に第一歩を踏み出しなさい。神は必ず共にいて下さるであろう。」

クリスチャンは穴からはい出した。雪がごんごんと降っていた。

「そうだ。」クリスチャンは大声で叫んだ。「神様がぼくのお父さんなら、助けて下さる。きっと助けて下さる。」

クリスチャンは雪の上にひざまずいて祈り始めた。

そこから少し離れた暗がりでも、先程からこの様子をじっと見ていたひとつの影があった。

クリスチャンが祈り終わると、人影は近づいてきた。

モエン・ホットベートーベンという名のその人は、じっと少年を見つめた。

「私はホットベートーベン兄弟です。私もモルモン教徒です。」彼はそう言って、先程パンとチーズをごちそうになったあの家へクリスチャンを案内した。家の中は暖かかった。ホットベートーベン夫妻には子供がなく、クリスチャンはわが子のような歓迎を受けた。ホットベートーベン兄弟は大工と家具職人をしていて、クリスチャンに家業を教えた。

クリスチャンは19歳の年に、シオンであるアメリカへ行こうと決心した。ホットベートーベン家具店で働いた数年間で旅費も十分にたまっていた。1887年の春、背が高く、端正な顔立ちをしたクリスチャン・モンソンは、数年前に死から救ってくれた育ての親に別れを告げた。

「どんなに感謝したらいいか……」クリスチャンはふたりから贈られた真新しい衣服やその他の物が詰まった大きなかばんを掲げ、オスロの棧橋に立った。

「愛はね、それだけで十分なのよ、クリスチャン。」ホットベートーベン姉妹は言った。涙が笑顔をつたい、地に落ちた。クリスチャンは自分の涙を隠すように背を向けて、船のトラップへ向かった。

「お手紙、ちょうだいね。」ホットベートーベン姉妹の声が聞こえた。クリスチャンは振り返ってもう一度ふたりを見た。彼女は夫に寄り添っていた。クリスチャンはうしろ髪を引かれる思いであった。実の親同然に彼らを愛していたが、自分の取る道は間違っていないことを知り、それを選んだのである。

それから数十年の後、長身で金髪のオットー・モンソンはノルウェーのオスロ市の町はずれにある一軒の大きな邸宅への道を急いでいた。うららかな戸外で遊ぶにはもってこいの気持ちのよい日である。

邸宅まで、歩いて30分とみて歩き始めたが、

かなり時間がかかりそうである。遅れたくないと思ったオットーは、大通りからはずれ、町でも特に貧しい裏町の狭い迷路のような通りを通った。大邸宅からちょっと離れた所に、粗末な家々が集まっていた。

宣教師はノルウェー語を話すというのが規則なので、オットーは一年余り英語を耳にしたことがなかった。彼が1軒の小さな家の近くを通りかかった時、英語で命令する声が聞こえた。

「あの家に入りなさい。」

オットーはいささか青ざめて立ち止まった。辺りを見回しても、人影はない。通りにだれもいなかった。なぜ、あそこに行けというのか？彼は考えた。今にも朽ちそうなあの小屋に人がいるのだろうか。彼はきよろきよろ辺りを見回して、また歩きだした。すると、小さいながら力強い声がまた聞こえた。

「あの家に入りなさい。」

ほかにだれとも約束はしていないはずなのに、とオットーは考えた。しかも、オスロ市の金持ちで、教養も地位も力もある人との約束以上にどんな大切なことがあるというのだろうか。

ちょうど2日前に、その金持ちの紳士がノルウェー伝道部のクリストファーソン伝道部長に、末日聖徒の教義を教えてほしいと言ってきた。そこで、伝道部の書記をしていたオットーにその責任が与えられたのであった。それを、どうしてやめられるというのだろうか。遅刻などでできなかった。

「あの家に行きなさい。」声が繰り返した。

オットーは邸宅の門が見える所で立ち止まって、引き返した。自分はどうかしていると思った。きっと無人の家に違いない。

彼は掘立て小屋の戸を叩いた。

建物の中から、足を引きずる音と床板のきしむ音が聞こえた。肌にぞくっと寒気が走った。戸は皮のちょうつがいから内側に開いて、青白い顔の老女が現われた。目に見る通りの年老いた姿であった。老いと病人の臭いを漂

おせたその外見は、死期の遠くないことを告げていた。老女はオットーを見上げると、やや苦しげに笑いかけた。オットーは彼女に恐ろしいまでの孤独を感じ取った。そして、その心の痛みを耐えられず、老女の暖かい栗色の瞳から一刻も早く逃れたいと思った。

「なにか？」老女は言った。声は弱々しかったが、明るい響きがあった。

オットーは何と答えればよいかわからなかった。

「私はアメリカから来ました。」その言葉しかなかった。

「ああ、私、アメリカに行った男子を知っていますよ。」

「名前は何かとおっしゃいましたか？」オットーは、別の大切な約束があるというのに一体何をしているのだと思いながらも、丁寧にそう尋ねた。彼は、家を間違ってしまったと言いつつ謝りたい気持ちにかられた。

「名前はね」老女は温かい昔をなつかしむようなまなざしで言った。「クリスチャン。クリスチャン・モンソン。でも、ずっと昔の話。もう50年になる。」

オットーはその名を聞いた時、心の底から燃えあがる感激が体中にみなぎり、あふれるのを感じた。彼は息もつかずに老女の名を尋ねた。こんなことが本当にあるだろうか。

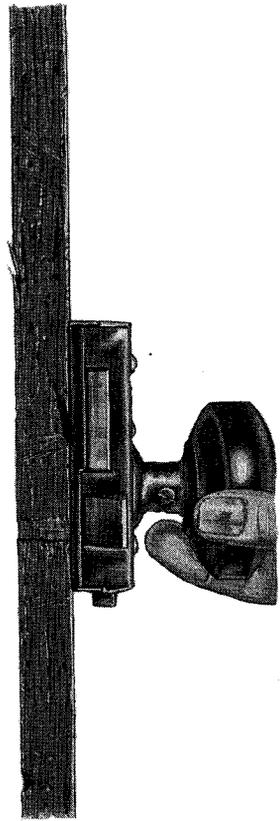
彼女は言った。「私はホットベートーベンです。」

オットーは言い知れぬ喜びを感じた。ほおに温かい涙が流れた。

「オットー・モンソンです。クリスチャン・モンソンは私の父です。あなたをよく存じあげています。アン・ホットベートーベン、よく存じています。」

通りは静まりかえっていた。オットーには時間が止まったように思われた。そして次の瞬間、オットーは老女のやせこけた腕が自分を抱くのを感じ、小さくすすりなく声を聞き、深い孤独が彼女を離れ去るのを感じた。

聞くところによれば、クリスチャンがアメ



リカへ旅立ってからしばらくして、夫婦はドラメン市からオスロ市へ引っ越したという。クリスチャンがアメリカから出した手紙は届かず、引っ越しの後5年ほどしてモエン・ホットベートーベン兄弟が病で亡くなった。以来アンは独り身となり、この数年間は病のために働くことさえできず、ひとり寂しく暮らしていたのだった。助けてくれる人はなく、孤独な死を恐れて助けを祈っていたという。

オットーは老女をしばしば見舞い、看病の手配をし、心地よい家に住ませ、食事や薬を与えた。それから数カ月後、彼女は亡くなった。周囲の人々に温かく見守られ、愛されてこの世を去ったのであった。



マーガレット・クブラー

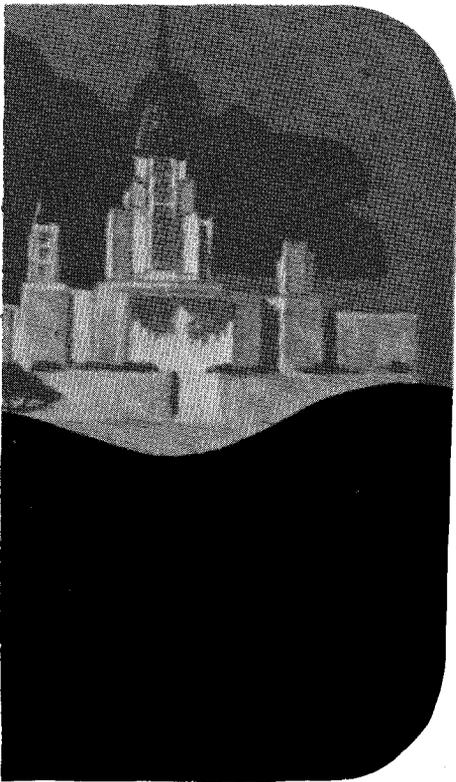
## 作り話が本当に

**私**はドイツの西ベルリンで1年間働きながら勉強していましたが、ちょうどクリスマス休暇で帰省した時のことです。高校時代の旧友が、もし一緒に教会に行くなら帰る時に空港まで送ってくれると言うので、彼について教会に行きました。出席してみても、集会の自由な雰囲気になんとも驚いてしまいました。ろうそくや式服や聖歌はそこになく、昔の町の寄合いといった感じです。そんな雰囲気には、私は非常に興味をひかれたのでした。

空港に向かう途中、オークランドを通った

時に、私たちは丘の上にある神殿に立ち寄りました。風と雨のひどい日でしたが、神殿はとても明るく輝いていました。訪問者センターでは、ガイドが案内して下さいました。

再び西ベルリンに帰った私は、一番近くの支部に行ってみました。そして、早速ふたりの若い宣教師からレッスンを受けることになりました。ところが、そのレッスンはすでに神を信じている人々のために準備されたものでした。その頃の私は、聖書は作り話で、キリスト教徒と称する人々は歴史的に見ても争



うになりました。

その後、冒険心も手伝って、私は友達とふたりでイスラエルに行き、キブツ（集団農場）で働くことにしました。私たちはイスラエルに住むことを許され、熱心に働きました。このようにして何カ月か過ぎましたが、私は宣教師から聞いた教えを忘れることができず、今の自分の生活は果たしてよいものだろうかとししばしば考えました。また、異国情緒豊かなイスラエルの国にいたこともあって、時間を見つけてはイスラエルの歴史を研究しました。オリブ山の頂からエルサレムを臨んだ時、私は感動し、胸が熱くなるのを感じました。そしてどういうわけか聖書の物語が生き生きとよみがえってきて、まさに現実の出来事のように思えたのです。こんなことは今まで一度もなかったことです。シナイ半島の砂漠の荒涼とした静けさ、ごくまれに鳥のはばたく音しか聞こえない静かな砂漠の中で、私は信仰の第一歩を踏み出したのでした。

秋の訪れと共に、私の心の中に、この教会の教えは真実であり、教会の活動は神からの靈感によるものであるとの確信が強くなってきました。そしていつの間にか自分は教会の理想や指導者、知恵の言葉を擁護するようになっていたのでした。

クリスマスの季節に合衆国に戻ってきた私は、教会のことをまじめに勉強したいと思いました。そして、友達や家族にモルモン教徒として対面する自分の姿を心に思い浮かべました。ふたりの姉妹宣教師からレッスンをもう一度受けた時、今度は実によく理解できました。旧友も私を喜んで助け、疑問に答えてくれました。そして私が真理を知ることができるように励ましてくれたのです。それから1カ月後に、私はその友達の手によってバプテスマを受けました。家族や友達と会うのは思っていたほど難しくはありませんでした。その時も今もそうですが、自分は正しいことをしているという揺らぐことのない確信が大きな勇気となって私を支えてくれたからです。

いばかりを引き起こしてきた人々だというのを持論にしていました。私は何度か集会に出て心に温かいものを感じましたが、当時の友達は人間の力しか信じない無神論者の学生だけでした。彼らは、イエス・キリストの存在を信じようとする私を陰で笑っていました。友達の方に心が傾いていた私は、霊的なものに中途半端な気持ちしか持てませんでした。そのため間もなくあれこれと思い悩むことに疲れて、政治活動に加わったり、ビールを飲んで、友達とどんちゃん騒ぎをしたりするよ

## 反逆の王子とリベカ

ぼくはどうしても集中できなかった。市立図書館は蜂の巣をつついたような騒ぎである。いらいらしたぼくは、自分がなぜ心を集中できる静かな大学図書館ではなく、この市立図書館を選んだかを一瞬忘れかけていた。するとそこに理由の主が近づいてきた。

彼女は今図書館の司書補として働いており、まさに一番の美人というところである。名札から彼女の姓がバートンということだけは分かっていた。その彼女の名前を知りたいばかりに、図書館通いを始めてきょうで3日目である。それなのに彼女は、「こんばんは」どころか、「シーッ、ここは図書館ですよ」の一声すらかけてくれなかった。

それでもぼくは、今晚こそはと望みをつないで、また出かけてきたのである。しかし、

心ここにあらずの状態では、本は開いても、勉強などできるはずがなかった。ぼくは、アメリカ史の本をわきに置き、腕を組んで、忙しく働くバートン嬢をじっと見詰めていた。彼女は時々ぼくの方をちらっと盗み見た。その時に、ぼくはにこっと大きくほほえんでウインクをした。すると、彼女はさっと下を向いて赤くなったほほを隠した。少なくとも私の存在には気づいてくれたのである。

ぼくは彼女の優雅な美しさにも参っていたが、何よりも控え目な服装が好きだった。多くの女友達といえ、よれよれのジーパンにでれっとしたブラウスというのが通り相場だった。けれども、バートン嬢はちゃんとした洋服を着ている。スカートの丈はひざまであり、厚化粧もなく、実際そばに寄って見な



ければ化粧しているのがわからない程であった。長い髪が頭からベールのように美しく肩に伸びている。服装、しぐさ、外見、どれをとってみてもまさに淑女であった。

ぼくがそういう彼女にこれほど心を引かれるとは、何とも奇妙な話である。ぼくは彼女とはまったく正反対であったからである。ぼくは髪の毛もひげも肩に届くほど伸び、色あせたジーパンに、刺しゅうを施したデニムのチョッキ、おまけにすりへったサンダルというさながら反逆の王子である。かたや彼女は徳と従順の権化のような淑女である。

ぼくにはぼくの生き方があり、彼女には彼女の生き方がある。その違いが打ち破ることのできない大きな壁となって、ふたりの間に立ちはだかっていた。その壁を突き破るには、ぼくが髪の毛を切って社会に順応するしかない。とんでもない！背広を着てネクタイを結ぶなど、たとえ彼女のためとはいえ、できない相談だ！

握った鉛筆が手の中でポキッと折れた。なぜぼくはあのおすましの司書なんかに、こうものぼせたのだろう。あの瞳、あの笑顔、彼女の存在そのものの中の何かが強烈に私の心を引き付ける。そして自分の意志などまったくおかまいなしに、彼女への思いは日ごとにつのってゆく。なのに、まだ彼女の名前さえ知らない。

ぼくは、彼女の方でぼくの生き方に同調してくれないかと考えてみた。近くの棚に本を返しに来た時に、ちおれ髪の彼女を想像してみたが、どうもぴたりこない。モナリザでも、バートン嬢よりは様になるという感じだ。

彼女は本を入れ終わり、机の方へ戻ろうとして後ろを振り返った。その瞬間目と目が合い、彼女の唇にかすかな笑みがこぼれた。わきを通り過ぎる彼女のために、ぼくは急いで椅子を後ろに引き、193センチの体を真っ直ぐに伸ばして、気をつけの姿勢で敬礼の真似をした。そして、「はじめまして、お嬢さん」とささやいた。いや、ささやいたつもりであった。けれどもぼくの声は図書館中に響いて、バートン嬢は顔を真っ赤にした。さざめくよ

うな笑い声が館内に広がり、ぼくはまったくばつが悪かった。

バートン嬢が机に戻って、ほおの色もおさまった頃、13歳くらいの、そばかすだらけの少女が彼女のところへやって来た。バートン嬢が少女の目をじっとのぞき込んで、ほっそりした手を少女のぼちゃっとした手に重ねたので、少女が「本はどこにありますか」といったいつもの質問をしたのではないことは分かった。ふたりの会話から「反抗」という言葉が私の耳に飛び込んできた。

ぼくは静かに、彼女の机に近い席に場所を移した。バートン嬢が何と云うのか興味があったからである。ぼくは雑誌を開いて読んでいる振りをしながら、思い切り椅子を後ろに傾けて、ひと言も聞き漏らすまいと耳をそばだてた。

少女が言った。「反抗の仕方について書いてある本が欲しいの。」

私は少しおかしくなったが、バートン嬢は真剣そのものだった。

「それで、あなたも反抗しなければみんなの仲間になれないって考えているのね？そうでしょう。」

「そうなの！だれもかもみんな反抗してるわ。姉さんだってそうなの。今晚も学長が構内でマリファナを吸うのを禁止しているからって大学のデモに出掛けたの。兄さんも、父さんや母さんから髪の毛を切りなさいって、うるさく言われているけど、かかとまで伸びたとしたって切りそうもないわ。」少女が私の方を見ているような気がした。

話は続いた。「父さんはストライキ中、母さんはウーマンリブの仕事で出歩いてばかり。それだって反抗でしょう？」

バートン嬢はじっと考え込んでいる様子であった。それからしばらくして口を開くところ言った。

「人が反抗する時はね、利己的だからなの。自分のやり方でやってみたい。そんな時にほかの人から反対があると反抗するのね。かんしゃくを起こすのと同じね。自分が間違っていることを知るのが怖いから反対意見に耳を

貸さないの。

正しいことをするには勇気がいるわ。特に良くないことをする方が簡単な時にね。でも、よく覚えておくといいわ。臆病な人が反抗するの。勇敢な人は法律を守り、自分が正しいと思っていることを行なうの。そして、何か悪いことがあれば、その悪いことに対して反対意見を述べる勇気を持っているはずよ。」

ぼくは憤慨した。思いを寄せ始めていた女性から、個人攻撃を受けたように感じた。しかし、どうにか自分の気持ちを鎮めた。彼女の言ったことは、ぼくの考えとは違っていた。ぼくはそのまま耳を澄ましていた。恐らく臆病者が反抗するのだといった言葉を撤回するか、あるいはその意味を明確にしてくれるはずだ。

少女は当惑している様子だった。「じゃあ、ジョージ・ワシントンやトーマス・ジェファソンは臆病者なの。だってイギリスに刃向かったでしょう。」

「ううん、違う。彼らは臆病者ではないわ。イギリスに刃向かったりしなかったわよ。あなたも知っているように、大英帝国はアメリカの移民たちに対して公平じゃなかったわ。重税をかけ、その上議席も与えようとしなかったの。もし公平なことをしていたら、アメリカ独立戦争はなかったはずだわ。」

何たる暴言！ぼくは席を立とうとした。ところが椅子の後ろにもたれかかっていたことをすっかり忘れていて、本と一緒にどすんと床にひっくり返ってしまった。何がどうなったのか分からずにきょとんとしているぼくの周りに、バートン嬢をはじめ、図書館にいた半分ほどの人たちが集まってきた。

「あのう、おけがはありませんか？」バートン嬢はぼくが倒れた場所をすばやく見回して心配そうに言った。

「いやあ、ちょっとショックを受けただけですよ。」ぼくは低い声でつぶやいた。

ぼくが起き上がろうとしてもつれた足を倒れた椅子の間から引き抜いている間に、バートン嬢は見物人を席に戻した。そして彼女はぼくのそばに立ってこう言った。

「何かびっくりさせるようなことを申し上げたでしょうか。」

「そうだよ！」ぼくは少し無愛想に言うてから、一瞬彼女を傷つけたのではないかと顔色をうかがった。そして、今度は優しく話しかけた。「バートンさん、あなたは反抗ということについてだいぶ偏見をお持ちのようですね。」

彼女はうなずいただけで何も言わない。ぼくは続けた。

「あなたは反抗するのは臆病者のすることだとおっしゃっていましたが、ぼくには納得がいきません。そのくせ、建国者たちはイギリスに反逆したんじゃない言うんでしょ。ねえ、……司書さん！」ぼくはこれ以上言うてはならないと思い、自分から口を閉ざした。

「お気にさわったらごめんなさい。……」彼女の声はそのまま小さくなっていった。すると向こうの方から一風変わった顔をした男の人が近づいてきた。

「主任司書だわ！」バートン嬢は言葉を飲み込むようにして、ぼくの腕をぎゅっと握ってから、急いで机に戻り、仕事を始めた。

また椅子に腰かけるのはつらかったが、閉館後にまた、バートン嬢と話ができるという思いが打ち身の痛みを局部麻酔のように和らげてくれた。「臆病な人が反抗するの。勇敢な人は法律を守り……」彼女の言葉をあれこれ思いめぐらした。

彼女は間違っている！ぼくは反対した。みんなもそうだ。人と違う生き方をし、社会の慣習を打破することこそ勇気がいるんだ。臆病者が髪を伸ばしたり、建物を襲撃したりできるか！君のようなことを信じていたら何もできない。

ところがふとある思いが心に浮かんできた。「だが、ダン。おまえは何を信じているんだ。」

「自由だ！」

するとその声はこうささやいた。「自由は、規則や義務や拘束があってこそ存在し得るのだ。」

ぼくは何も言えなくなった。心の内からく

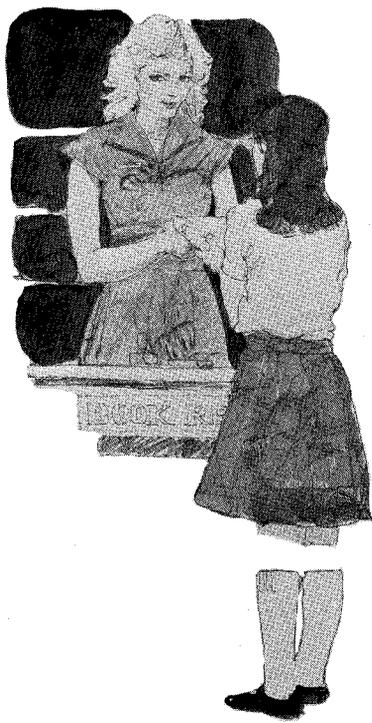
る声に返答できなかった。ぼくは反抗することで勇氣を見せていたのではない。ただ安易な道を取っていただけだった。家庭も宗教も窮屈すぎた。義務や責任から逃れて勝手に楽しみたかった。ただそれだけであった。

父はそんなぼくをよく怒っていた。母もぼくのことで泣いた。ぼくは父母を傷つけたことで自己嫌悪に陥ったこともあった。しかし両親から失望されても友達から笑われるよりはましだと思っていた。こうして次第にぼくは家族から遠ざかるようになった。そして表面は平静を装っていたが、心は深く傷ついていた。

「臆病者が反抗する！彼女の言うことが正しいのかも知れない。」ぼくはひとり言を言い、深く息を吸った。疲れた両肩の重いくびきを取り払われたような気がした。こんな自由な気持ちになったのはここ数年来なかったことだ。

ふと、人の気配を感じて振り返ると晴れやかな笑顔をしたバートン嬢がそこにいた。

「何か一人で楽しそうにおしゃべりしていたようですけど？」彼女は言った。



「うん。でも、あなたとお話した方がいいなあ。」

彼女はにこっと笑った。

「車で送りたいけど、いいかな？」

「すぐ近くなんです。だから、いつも歩くの。でも、あなたが歩いて送って下さるというのなら……」

ぼくは即座に応じ、ふたりはさわやかな秋の夕暮れの中を歩いた。1、2分間位、黙っていたが、やがてぼくが先に口を切った。

「バートンさん、お名前は？」

彼女は笑って、「ええ、図書館で働く前は、リベカって呼ばれていました。」

「ベッカー・バートン！かわいい名前ですね！」

「ベッカーじゃありません。リベカです。」そういってふたりは再び黙ってしまった。そこで話のよりをもどすために彼女が言った。

「リベカはイサクの妻でしょう。知っていらっしゃる？」

ぼくはうなずいた。

「それじゃ、あなたのお名前は？」

「ダンです。」

「ダニエルも聖書に出てくるお名前ね。聖書はお読みになったことおありですか？」

「ずっと前に、ほんの少し。」その夜、聖書の話をしよとは、つゆほど考えてもいなかった。

「ねえ、ダン。もしも図書館が火事になったら、私、まっさきに聖書を持ち出すと思うわ。」彼女の目は輝いていた。彼女の生活の中で宗教が非常に重要な位置を占めていることがわかった。

リベカはぼくが一向にのってこないで、少しとまどったように口ごもった。「こんな時に聖書の話なんかしてはだめなのね。」そう言ってから尋ねた。「あなたはクリスチャン？」

その質問は、ぼくの過去の扉、心のき裂の奥深くに隠し続けてきた扉を叩いた。自分で気付かない記憶と感情の中にその答えが秘められていたのである。

あれは焼け付くように暑い日のことだった。妹のスージーとふたりで、父が毎週恒例のゴ

ルフ試合を終えて迎えにくるのを教会の外で待っていた。汗が背中を伝って落ち、スージーの金色の巻毛も汗ばんで、重く垂れ下がっていた。ぼくたちふたりは友達が親子で教会から帰って行く姿をうらやましげに見ていた。父と母と一緒に教会に来てくれたらいいのにと心から思ったものである。そのことについて祈ってもみた。しかし、両親はいつも忙しいとか疲れたとか言っでは、私たちの期待を無にしてきた。そして父が車で迎えに来た時には、ふたりともいいかげん待ちくたびれ、父や母に無性に腹を立てたものである。

母はたいてい家で夕食の仕度をして待っている。食卓を囲む段になっても、まだ怒りはおさまらない。私はほうれん草がきらいだったので、そのまま皿をスージーに渡した。とたんに父と母が小言を言う。「ダン、ほうれん草も少し食べなさい。体にいいんだから。」

ぼくはもうがまんできなかつた。「じゃ、パパとママはどうして教会に行かないの？ほうれん草がぼくにいいって言うけど、教会はパパとママにいいでしょう。」父はぼくをなぐり、母は泣きながらテーブルを立った。ぼくは傷

つき、怒って家を飛び出したのだった。

「ぼくはクリスチャンかな？リベカ。」ぼくはわれに返って彼女にそう尋ねた。「少なくとも昔はそうだったかもしれない。」彼女はぼくの気持ちを察してそれ以上何も言わなかった。

ふたりは薄暗くなった並木通りを一緒に歩いた。落葉を踏むカサカサという音だけが聞こえる。ぼくは寒々とした暗い世界にひとり取り残されているような孤独感に襲われた。今は何よりも、リベカの助けが欲しい。彼女は自分にはっきりとした確信を持ち、心も平安である。ぼくは彼女のような強さを知恵が欲しかった。それでいて彼女の温かいまなざしがこわくて、足元ばかりを見ていた。

ぼくは小声で尋ねた。「リベカ、君はどうしてみんなと違うの？」

神を信じているからということとは容易に想像できた。これまでも彼女は非常に信仰の篤い女性だと感じていたからである。しかしぼくは、彼女をあんなに繊細で、優しく、思いやりのある人にする宗教は一体何なのか、知りたいと思った。

ぼくはなおもしつこく尋ねた。「リベカ、君の宗教は何なの。カトリック？プロテスタント？それとも別の宗教？」

彼女の唇にかすかなほほえみが浮かんだ。「『別の宗教』の部類に入るのでしょね、ダン。私、いつも真理を捜し求めているの。そしてそれを不思議なところで見付けることがあるの。でもいつもひとつの問題に突き当たるの。この世にあらゆる真理を持つ宗教が本当にあるのだろうか。」

リベカの質問はぼくの胸を強く打った。彼女は問いかけるようなまなざしでぼくを見ていた。ぼくは彼女の目を見ることができなかつた。眼前に自分の過去がゆらゆらと燃え立ってきてどうしようもなかつた。ぼくは黙って頭を垂れ、そして祈った。何年も忘れていた祈りである。それから頭をあげ、じっと彼女の目を見詰めて、かみしめるように言った。

「リベカ、君はモルモン教会のことを聞いたことがあるかい？」



## 神のみ前に立つ

これからしばしの間皆様にお話をすることに、私はみたまの助けと、私の兄弟姉妹である皆様の友情と信仰と賛同が得られるようにと願っている。今朝私は長い時間お話すつもりはないので、大切なことだけを申し上げたい。御父の慈悲により、このように皆様と共に末日聖徒イエス・キリスト教会の創立86周年記念に当たる今大会の開会の席に出席し、このような光景を目にさせていただいたことを私は心から感謝している。言葉ではとてもその感謝の気持ちをお伝えしきれないほどである。

全能の神の導きと靈感の下に、神の権能によってこの末日の業を始めた予言者ジョセフ・スミスと兄弟たちは、私が今このタバナクルで目にしている光景を見ることを許されたとしたら、きっと喜ぶに違いない。万物を見通したもう神があらゆる御自身の業を目にされるように、彼らも私たちを見る特権があると私は考えている。なぜならば、救いと昇栄

をもたらすため人の子らの間に神の業の基を据えるべくこの神権時代ならびに過去の神権時代に選ばれた人々は、御父の子らをその罪から贖い救うために、神の知恵と目的により与えられた彼ら自身の働きと努力と使命の結果を霊界から見下ろす権利を奪われることはないからである。

### 神の王国を見守る予言者たちの眼

したがって、予言者ジョセフ・スミスを初めとするこの神権時代に殉教した人々、そのほかブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、ウィルフォード・ウッドラフ、彼らと共に地上での使命を果たした忠実な人々は、その発展のために彼らが生涯の間働いた神の王国に興味をもって注意深く見守っているに違いない。彼らは今、幕の彼方からこの地上にいた時以上に私たちの幸福に深い関心を寄せていると私は信じている。……



## 栄えある示現

私はこのような気持ち、喜びを心の中に持てることを神に感謝している。私は、創造主であり御父である全能の神のみ前だけでなく、肉における神の独り子、世の救い主のみ前に立っていることを神に感謝する。また、ペテロとヤコブ（私たちは気付かないが、ヨハネの目も私たちに注がれている）の前に立ち、さらにはジョセフ・スミス、ハイラム・スミス、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、

---

私はこのような気持ち、喜びを心の中に持てることを神に感謝している。私は、創造主であり、御父である全能の神のみ前だけでなく、肉における神の独り子、世の救い主のみ前に立っていることを神に感謝する。

---

ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノー、その他イエス・キリストに対する証に雄々しく、この世での使命に忠実であった今は亡き人々の前に立っていることを感謝している。この世を去る時、私は、自分が彼らの模範に従い、彼らが携わった任務を彼らと同じように果たし、また彼らが忠実であったように私も自分に委ねられ、求められた義務に忠実であったという気持ちをもって彼らに会う特権に浴したいと思っている。それも、こ

の場で、愛と一致と調和のうちに、自分も彼らが果たしたように義務を果たしたという絶対的な確信をもって会いたいと願っている。私がひとり感激に浸っているとすれば、どうかお許しいただきたい。しかし、皆さんも、もし自分が全能の父なる神のみ前、神の御子と聖い天使たちのみ前に立っていると感じたならば、特別な感動を覚えるのではないだろうか。しかもその感動、感激はひとしおであろう。私は今それを心の奥底から感じている。

永遠の生命とは、神とイエス・キリストとを知ることである

ところで、私は幼い時から、イエス・キリストの福音がそれを受け入れて従うすべての人に救いをもたらす神の力であることを宣言することを使命とし、務めとしてきた。私は、私たちの主なる救い主イエス・キリストの御父である神、御子すなわち肉における独り子を生みたまうた生ける神を信じている。世の人々に対しては、もちろんのこと、教会幹部の兄弟たちに対してもこのことを宣言する義務が私にある。御父の生みたまうこの御子は成長し、御父と生き写しになられた。そのため主は、「わたしを見た者は、父を見たのである」（ヨハネ14：9）と言っておられる。

世の中には、神は単に靈に過ぎず、広大な宇宙に満ちていて、人の形をとるとらないにかかわりなくどこにでも存在するという考え方があつた。しかし、私はそのような教義を信じることはできない。なぜなら、広大な宇宙に満ちて、同時にすべての場所に存在するとすれば、神は体を有する存在であるとは考えられないからである。永遠の父なる神が、個人として同時にふたつの場所に現われると考

えることは、道理に合わない。物理的にも神学的にも矛盾している。それは不可能なことである。しかし神の力は広大な宇宙全体に及んでいる。神の力は御自身が創造されたすべてのものに及び、神の知識は万物を包含している。そして神は万物を治め、万物を知っておられるのである。

永遠の生命とは、唯一のまことの生ける神と、神が遣わされたイエス・キリストとを知ることであるという聖典の言葉は真実である。

---

永遠の父なる神が、個人として同時にふたつの場所に現われると考えることは、道理に合わない。物理的にも神学的にも矛盾している。それは不可能なことである。しかし神の力は宇宙全体に及んでいる。

---

(ヨハネ17：3参照) 末日聖徒は、聖典の教えと予言者ジョセフ・スミスを通して下された啓示を学ぶことによって、真実の生ける神と、神がお遣わしになった御子について知ることができると私は考えている。そのことを単なる知識としてではなく、証として身に受けることができるならば、私たちは何をおいても主の教えを守り、主の律法に従い、主の要求に応え、そして神の宮居ならびにイエス・キリストの福音のすべての儀式を受け入れよ

うという気持ちになるだけでなく、その決心もできるはずである。この神の宮居で執行されるすべての儀式とイエス・キリストの福音のすべてこの儀式は、御父のみこころにより、地上の子らに天父のみもとに帰る資格を得させるために計画されたものである。神とイエス・キリストを知っている者は、神がその子らに課せられるすべての要求に忠実に応えることによって、その知識を確固たるものにする。そこに救いと永遠の生命の賜がある。悪魔は私たち以上に御父を知っている。黎明の子ルシフェルは私たち以上に神の御子イエス・キリストを知っている。しかしその知識が永遠の生命にまで及ぶことはない。なぜなら、ルシフェルは知識がありながら反抗しているからである。知っていても従順ではない。また真理を受け入れないであろうし、真理に従わないであろう。したがって、ルシフェルは滅びと言われる。ルシフェルに救いはない。このことは私たち神のすべての息子、娘に当てはまる原則である。私たちは皆、判断力と知識を持ち、因果関係を説明できるからである。また事の真偽、善と悪の区別ができ、光を見、光と闇の識別ができるからである。

福音は私たちの養育掛である

さて、イエス・キリストの福音とは、唯一まことの生ける神と神が世に遣わされた御子を知ることである。この知識は、主のすべての戒めを守ることににより、また信仰を持ち、罪を悔い改め、罪の赦しを得るための水に沈められるバプテスマ、神の権能を持つ者の按手札により聖霊の賜を受けてはじめてもたらされる。イエス・キリストの福音は、人に救いを得させる神の力である。(ローマ1：16参

照) 真理に従い、神が定められた秩序に従うことである。それは、神の家は秩序の家であって混乱の家ではないからである。(教義と聖約132:8参照) 主は人々に説き、教え、勧め、訓戒し、義の道を歩ませるために、御自身の教会に使徒、予言者、祝福師、監督、教師を置かれた。主の教会に集っている人々は、イスラエルの中であって教え、導き、勧めるための権能を神から授けられている者の声に耳を傾けなければならない。イエス・キリストの福音にあってこれらはすべて欠くことができない。またこのほかにも、神の宮居で執り行なわれる儀式など多くの大切なことがある。神の宮居の儀式は、この世が創造されて以来、この神権時代ほど明瞭に示された時代はないであろう。これらの儀式はすべて、その時代その時期に応じて欠くことのできないものであった。私たちはだれも、神が私たちに啓示し、求めておられるこれらのことを無視できるほど偉くはないし、立派でもない。また神から離れて生きる力もないのである。神に依存しないで生きられる者はひとりもない。私たちは神が創造された地球に住み、神が創られた空気を吸って生きている。また太陽の光に浴している。私たちが食べている物、身につけている物もすべて神が創られたものである。神は、私たちの衣食住、運動、人間に必要なすべてのものを備えて下さっているのである。

### 神権の回復

私たちは神の恩恵を受けている。いつ、いかなる瞬間にも神に依存している。私たちは御父と御子を信じ、御二方が人類に与えて下さったみ言葉と勧告と神の権能を信じている。

また、予言者ジョセフ・スミスの聖なる使命をも信じている。私たちは、ジョセフ・スミスをこの時代における権威、権能を授けられた者、知恵と知識を付与された者として受け入れている。ジョセフ・スミスは、イエス・キリストの教会の基を据え、全人類に救いを得させる完全な福音を回復し、また人の子らの中にキリストの教えと福音の儀式を回復した。その教義と福音の儀式はもちろんキリスト御自身が教え、執行しておられたものであり、キリストから権能を受けた弟子たちが、悔い改めて御父と御子のみ名を信じるすべての者に授けていたと同じものである。

私たちは、人の子らに生命に至る儀式を執行する鍵を有する神の権能を回復して下さったのは神であると信じている。この神の権能がなければ、だれも水に沈められても罪の赦しを受けることができないし、またそうしないであろう。罪の赦しを受けるには、神の権能によらなければならない。神の権能を持たずに行なっても、主はその働きを受け入れて下さらないであろう。なぜなら、主から権能を授けられて資格ある者とされず、また召しも任命も受けていない人間の手による業を主は受け入れられないからである。しかし、神より召され、聖任あるいは任命されて、天父と御子と聖霊とのみ名により執行する権能を授けられている場合は、創り主であり権能の付与者である神はその業を認められる。私たちが神の権能を受け、神のみ言葉に従って行なうならば、神は約束を果たして下さる。そうでなければ、そこには何の約束もない。

### キリストの証し人である十二使徒

時間の関係で、私の考えているすべてのこ

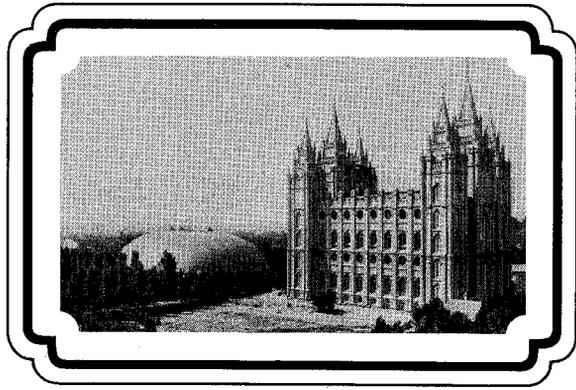
とを皆さんにお話することはできないが、これだけはお話しておきたい。イスラエルの家の中であって奉仕するように十二使徒の職に召されているこれらの兄弟たちは、その召しの精神を豊かに授けられている。またそうあるべきである。例えば、今この場にいる12人のキリストの弟子は、イエス・キリストの神聖な使命を直接目にし、耳にした証し人である。十二使徒は、ただ単に私は信じているとか、信じているので受け入れているとか言うことでは許されない。啓示を読みなさい。十二使徒には知識がなければならない。自分の目で見、耳で聞いたかのように、自分で知識を得なければならない。真理を知らなければならぬと主は教えておられる。十字架につけられた後死からよみがえり、現在全能の力を持って神の右におられる世の救い主、イエス・キリストを証することが十二使徒の使命である。これが彼らの使命であり、義務である。また教えであり、真理である。そして、この教えと真理を世界に宣べ伝えること、また宣べ伝えられるようにすることが彼らの義務である。自分で行けない所へは、他の人を召して助けてもらわなければならない。……彼らの指示の下に、世の人々に福音は宣べ伝えられ、真理は宣言されるのである。その真理とはすなわち、ジョセフは神の予言者であり、神の王国の基を置く権威を授けられているということである。私が語る神の王国とは、文字通り神の王国である。キリストは王であって、人民ではない。神の王国の王はほかにいない。神がその王なのである。

#### 末日聖徒の資格条件

さて、私たちには皆、忍耐、自制、赦し、

謙遜、慈愛、偽りのない愛、真理への献身が必要である。私たちは罪や不正、また福音の要求に対する反対心と不従順を是正しなければならぬ。以上が末日聖徒に求められる条件である。つまりイエス・キリストの教会の立派な会員となるための条件であり、神の相続人、イエス・キリストと共同の相続人となるための条件である。立派な教会会員は決して酒を飲んだり、騒ぎを起こしたり、神を冒瀆したりはしない。また兄弟や隣人を欺いたり、純潔や信頼、正義の原則を破ったりしない。末日聖徒イエス・キリスト教会の立派な会員は、これらの悪事を避け、またそのような生活をしなないので、今述べたような事柄で責められることは決してない。次に、私たちにはこの世で果たすべきひとつの使命がある。それは、男性も女性も、分別のつく年頃つまり自己の責任を知り得る年齢に達した子供も皆それぞれ、世の人々の模範にならなければならないということである。真理を宣べ伝え、真理に対する証を述べる資格だけでなく、生活そのものが、また言葉遣い、行ないのすべてが、軽率な者、無知な者に対する説教となり、彼らに親切、純潔、高潔、神への信仰、全人類に対する愛を教えるものにならなければならない。

神の恵みが皆さんと、信仰ある者すべての上であり、終わりまで忠実であることができるように。必ずしも速い者が競争に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。終わりまで耐える者こそが勝利をおさめるのである。アーメン。



## あの光は一体どこから……

スーサ・ヤング・ゲイツ

1893年4月の上旬は、嵐の吹き荒れる薄暗い日々が続いていました。地は鉛色の雲に覆われ、雨は毎日のように地に打ちつけ、風が勢いよく地の面を吹き抜けていきます。しかし、聖徒たちの心は、この暗い天気をものともせず、明るく輝いていました。ソルトレーク神殿の献堂されたのは、このような嵐の日のことでした。

献堂式の間、私は恵まれて集会の公式記録を筆記する責任を与えられました。そして、「事実上の献堂式」と言われる最初の集会で、私は胸壇の東側の一段低いところにある机についていました。

私の隣には、それまで外門の整理にあたったジョン・ニコルソン兄弟が座っていました。ジョセフ・F・スミス大管長が立って説教を始めた時のことです。大管長の顔がまばゆいばかりの光に照らされ、私は何ともしれない特別な気持ちを感じました。その時、私ははっきり雲が切れ、雲間から光が射し込

んで、大管長の顔を照らしたのだと思いました。

私は、ニコルソン兄弟の方を向いてささやきました。「ちょっと見て下さい。スミス大管長の顔に太陽の光があたって不思議な輝きを放っていますよ。」

ニコルソン兄弟は小声でこう答えました。「太陽なんて照っていませんよ。空は黒い雲に覆われていて真っ暗です。」

私は、窓の外を見て驚きました。ニコルソン兄弟の言う通り、黒い雲が町全体を覆い、陽は射していなかったからです。

では、スミス大管長を照らしていたあの光は、一体何でしょう。愛する指導者であり、予言者であるジョセフ・F・スミス大管長に聖霊の降ったのを見たのでした。それはスミス大管長が「主より選ばれた者」であるという私の証をますます堅固なものにしました。私は、この出来事を人生における最も神聖な経験としていつまでも大切にしています。

スーサ・ヤング・ゲイツ 1856年3月18日、ブリガム・ヤングとルーシー・ビゲロウの娘として生まれる。「ヤングウーマンズ・ジャーナル」創刊者、「扶助協会誌」編集者、1911年から1922年まで扶助協会中央管理委員会を務める。

## お酒に代わって永遠の生命の水を



日本仙台伝道部八戸支部

大上善通

1974年、ある春の日の夕暮れ時、晩御飯を家族そろっていただきながら、私は、いつもの晩酌を楽しんでいました。牧水が歌った「それほどにうまさかと人の問いたれば、何と答えんこの酒の味」という31文字が、自分の気持ちをとこのほかよく表現しているのに感服しながら、盃を口に運ぶ手はいっこうにとどまるどころを知らません。「味わい派」だった私は、家族の楽しそうな顔と好みの酒の肴さかながあれば最高の左党ひだりとうだったのです。

私がいつものように食卓でほろ酔い気分になっていると、来客の気配がして「お父さん、外人のお客さんですよ」というので玄関に出てみました。するとそこに背の高い、若いアメリカ人がふたり立っていました。彼らは上手な日本語でこう尋ねました。「あなたは家庭の幸福についてどう思いますか。大切だと思いますか。」よく自動車や化粧品化粧品のセールスマンに訪問され、質問を受けることがあったので、またその手の売り込みかと思って早急に帰ってもらおうとしたんです。そして私が「勿論大切だと思います」と答えると、「家庭の幸福を得る方法があります。あなたはそ

れを知りたいですか」と聞かれました。「ええ、そういうものがあれば知りたいですよ。」中座してきた食卓の、酒と肴のことが気になっていた私は、半分上の空でそう答えました。気分よく酔っている心が乱されることに対して幾分の腹立たしさと、外人が上手な日本語を話すことへの多少の珍しさも手伝って、ここまで相手をしてきたのですが、それ自体何とも不思議なことでした。そして何よりも、相手の真意が測りかねました。何かを売のだったら早くそれを言ってくればよいのに。しかし一体彼らは何を売ろうとしているのだろうか。

「それでは少しの時間、家庭の幸福ということについてお話をし、スライドをお見せしたいのですが、よろしいでしょうか。」パンフレットと名刺を出してそう言ったのは、ノールド長老とデューク長老でした。ふたり共、黒いスーツにネクタイをキチッと締めた日本語の上手な外人でした。しかも彼らは私の望んでいる通り「これが家庭の幸福だ」というたものを本当に目の前に広げて見せてくれそうでした。しかし何しろこちらは酒を飲んでいる最中だし、相手の態度にも非常に厳粛なも

のを感じたので、失礼になってはいけないと思い、後日の時間を約束して引き取ってもらいました。

翌々日、約束の時間になると、彼らは本当にやって来ました。しかも早くもなく、遅くもない約束の時間ぴったりに訪問を受けたのです。家庭の夕べのプログラムを紹介され、スライド（「モルモンとは」だったと思います）を見ました。日本の一家団らんの有様とは一味違った家庭の夕べのプログラムは、外人を交えて楽しいものとなりましたが、何かしら違和感がありました。それから回復された真理、ジョセフ・スミス、永遠の生命、救いの計画、幸福の探求などのレッスンを、ドレーパー長老とデューク長老は熱心に教えて下さいました。そして3カ月後に「知恵の言葉」のパンフレットをつきつけられました。それまでは、お茶を出しても飲まないで、不思議に思いながら尋ねてみると、いただかないというし、自分だけお茶を飲みながらレッスンを受けていました。これで理由がはっきりしました。訪問して来る前に、陰でタバコを吸い、時にはお酒を少し飲んで待っていたこともありました。けれども、これからはそれもできなくなってしまいます。まさに青天の霹靂（かみなり）とも言えることでした。でも頑張ってみようと思い、実行に移しました。タバコはすぐ止めることができたのですが、お酒の方はなかなか止められません。3日止めては、4日目に手をつけたり、5日止めては6日目にまた飲んだりといった有様でした。

そのうちに、1975年8月、東京で地域総大会が開かれることを聞かされました。一生に一度位のことだからというので、家族全員で参加しました。子供たちはちょうど学校が休みなもので、東京見物を兼ねて親類の所へ泊り

がけで出発し、私は土曜日の夜の特急寝台便で出発しました。ところが2、3分早い特急寝台車に乗ってしまったのです。席でゆっくりくつろいでいると、検札に回ってきた車掌は「お客さん、これは次の列車のキップです。盛岡まで止まりませんから、そこで降りて乗り換えて下さい」というのです。少なからず旅行を経験していて、しかも慎重な私が、今まで一度もなかったこんな間違いをしたのですから、驚き、また不思議に思われてしかたがありませんでした。とにかく盛岡駅で降りました。同じホームから乗ったのに、しかも慎重派の私は、いつも定時より少し早めに行動し、準備し、余裕をもって臨んでいるのに、そのホームに立って何の疑いもなく列車に乗ったところが間違っていたなんて、とても信じられない。こんなことがあるものだろうか。遠ざかり行く特急列車の後部の赤い灯火を見ながら、私は深夜のプラットホームに一人残された自分にバツの悪さを感じ、それまで総大会出席のためと思って守ってきた知恵の言葉を破ってつい缶ビールに手を出したのです。ちょうど飲み終った時、同じホームに本当の列車がやって来ました。

盛岡から乗り込んだ私は、残念ながら八戸で乗り込んだ時の私ではありませんでした。しかし東京の武道館での経験は私に非常に大切なものを与えてくれました。難しいながらも靈的な経験でした。昼休みに、自分の席で妻と並んで弁当を開いていると、八戸で伝道したことのある宣教師が、御両親と共にやってきて、にこやかに握手を求めました。恐らくこの場で御両親と落ち合いアメリカへ帰るところだったのでしょうか。その時、私は彼らの雰囲気から温かい心と測り知れない愛を感じることができました。そのうちに通訳さ

れた渡辺驩兄弟も回ってきて握手をして下さいました。会場のあちこちで楽しそうな交歓が行なわれていました。何という心なごむ光景でしょう。最後の閉会で歌った「神よまた逢うまで」という讃美歌は何と素晴らしかったことでしょうか。立ち去りかねて立ち止まり、振り返っては手をあげ、じっと見返す大管長と教会幹部、それを見送る教会員。何と感動的で靈的な情景でしょう。私も共に涙して立ちつくしていました。武道館を出て駅まで歩く道は、靈的な経験に顔を輝かせた沢山の人人であふれていました。関西弁やその他さまざまな訛のある日本語と外人の入り交った群が、一様に興奮した会話を交わしながら東京の街を歩いていました。もう東京という感じはなく、どこか違った国の違った街を歩いているようでした。その後、テレビの画面などで武道館を見かけるたびに、あの時の感激を思い起こし、ついほかの催しが空虚な、軽薄なものに思われてならない自分に驚きを感じていました。

同じ年の暮れ近く、11月29日、妻と長男がバプテスマを受けました。極めて靈的で、美しいバプテスマ会であったと宣教師は表現していました。私も一緒に受ける様にチャレンジされましたが、頑強に拒み続けました。亡き父のことや、自分の墓地を確保することなどまだまだ自分で解決しなければならない問題が残されていたからです。しかし妻子のバプテスマを目の当たりにして、彼らが遠く手の中から離れて行ってしまうように感じました。心の中にぽっかりと穴があいたようになり、家族がばらばらになってしまう寂しさを感じました。ここに至って改めて、自分の家族をこの上なく愛していることを知ったのです。そしてモルモン経を熱心に読み、祈りま

した。酒もとっくに止めていました。ほかの事はもう何も考えなくなっていました。私にとって、家族以外に必要なものは何もなくなくなっていたからです。そして翌年の1976年1月23日、大寒の最中にアルコンセル長老とノウルズ長老によってバプテスマを受けました。これでやっと家族がひとつになれる機会を得たわけで、酒の代りに永遠の生命の水を飲むことになったのです。思えば実に1年8カ月もの間、宣教師の皆さんに入れ代り立ち代りお世話になってきました。そればかりでなく兄弟姉妹の皆さんにも、自宅でファイヤサイドを開いてもらったり、教会で心温まるフェローシップを受け、本当によく助けていただきました。ある時には、正月早々一家そろって流感にやられ、枕を並べて寝ていると、熱いスープの入った鍋と、炊きたての御飯が入った釜がどかっと持ち込まれたこともありました。またある時には、知恵の言葉に応じようとしない軟弱な私の意志を言葉厳しく叱責をするアメリカ人宣教師に、優しいだけだと思っていた彼らの毅然たる態度にびっくりさせられたこともありました。

私は求道者の期間があまりに長かったので、宣教師の名刺を沢山持っています。その一つ一つの名刺を見るたびに、宣教師の顔が懐かしく思い出され感謝の念がこみあげてきます。私はバプテスマ会でこう証しました。「皆さんのお仲間入りをするのはこんなに遅くなりましたが、年長者なので、皆さんよりもお先に、早く天の王国に行けると思っています。」でも今度は間違いなく、天の王国行きの特急列車に乗れるように備えて行きたいと思っています。イエス・キリストのみ名により申し上げました。アーメン。

# 盲目の合唱団員

他のタバナクル合唱団の団員たちと同じく、マリアンネ・フィッシャー姉妹がタバナクルに到着するのは、日曜日の朝、7時45分前のことである。

フィッシャー姉妹は、まず団員の衣裳が置いてある地下の更衣室に向かう。そして、朝の放送で着る衣裳に着替える。それから階段を上り、資料室で楽譜を受け取ると、合唱団の席に通じる入口をくぐり、上段の自分の席に着く。ちょうど放送前のリハーサルが始まる8時である。

発表と祈りに続き、伴奏が始まる。彼女は指揮者の合図に神経を集中する。別に変わったところはない。300名を越える合唱団員が、年に52回も繰り返している同じ光景である。しかし、目の見えないただひとりの合唱団員であるフィッシャー姉妹にとってこれほど特別なことはない。

「歌を志す教会員にとって、タバナクル合唱団と共に歌うことは生涯の夢だと思います。」彼女は合唱団員となる過程を回想しながら語っていた。「私はオーディションを受けるために随分長い間待ちました。そのために何度もお祈りしました。お祈りだけでなく、自分自身を備える努力もしました。」

音楽修士の称号を獲得し、(そのほか聴覚学と言語病理学も修め)ワード部や大学の数多くの聖歌隊に所属してきた彼女でさえも、待ちに待った機会が訪れたときは、不安でたまらなかった。

「申し込んでから長い間、何の返事もありませんでした。そして、オーディションに呼ばれて歌ったときも、あまりよい出来ではありませんでした。」

しかし、タバナクル合唱団の指揮者ジェロルド・D・オトリ兄弟の印象は、少し異



タバナクル合唱団指揮者ジェロルド・オトリ兄弟と談笑するマリアンネ・フィッシャー姉妹

なっていた。「私は以前に、大学のアカベラ・クワイヤーで目の見えない方々を指導したことがありました。その経験がなかったら、彼女にチャンスを与えていなかったと思います。その時、目の不自由な人には周囲の物事を知覚する特別な感覚があることを知りました。それに、彼女はとても美しい声をしていました。」

そうだからと言って彼女の合唱団加入がすんなりといったわけではなかった。彼女はその頃を振り返ってこう言っている。

「オトリー兄弟は、私がどのようにして歌を歌い、他の合唱団と同じように立ったり座ったりできるか尋ねました。これは、もちろん私にとってとても重要なことでした。私は、隣にいる姉妹のドレスか、手を握ってればわかります、と答えました。」

「オトリー兄弟は、目が見えないという障害にもかかわらずに、私の音楽家、歌手としての才能を認めて下さいました。本当に感謝しています。彼は私をひとりの普通の人間として扱って下さいました。これは私にとって非常に大切なことです。私は特別扱いされたくないのです。」

「私はいつもこのように考えています。自分の身にふりかかったことはしかたがないが、これからどうなるかは自分次第で決まります。」

団員たちは家庭に帰ると、ピアノの前で各自のパートを復習したり、楽譜を読んでみる。ところが、フィッシャー姉妹と夫のジムはまず最初に楽譜を書き換えなければならない。点字用タイプライターの前に座り、ジムが読む言葉を打っていく。それが終わると、各音節に音程と音符の長さを点字で記す。

この点字楽譜を使って、難しい部分を練習する。彼女はほとんどの曲を覚えている。まれに、自分の知らない特別な曲を歌うときは、指で点字を読み取りながら歌えるように、点字の楽譜をフォルダーに入れておく。

楽譜の上げ下げも微妙な問題である。フィッシャー姉妹の隣にいつも座っているダンツェル・ネルソン姉妹はこのように語っている。「彼女は私の楽譜の上に軽く手を置いていて、私の楽譜の動きに合わせて自分の楽譜を上げ下げします。立ち上がる時は、彼女の手を軽く握って合図します。座るときも同じよう

にします。しかし、彼女は周囲の状況にとっても敏感で、私の動きをほとんど自分で感じ取っています。目が見える私たちよりも、周囲の動きがよくわかっているようです。」

フィッシャー姉妹も次のように述べている。「多くの人々は目で判断しますが、私は耳で判断します。」

彼女の自立心に満ちた態度は、物心がついたころから生活の一部になっていた。生まれながら目の不自由な彼女は、特殊な盲学校に通った。そして、オグデン高校に入学した。

そこは胸を躍らせるようなまったく新しい世界だった。しかし、もはや点字の書物はなく、テキストを読んでくれる人もいなかった。

それからフィッシャー姉妹はブリガム・ヤング大学の社会学の学士号を取得し、ユタ大学の修士課程を終えて、情緒や読み書きの能力に問題のある児童の教育にあたった。その傍ら、オルガンとピアノを習い、教会の奉仕でも2度のステーク部宣教師の召しのほかに子供や大人日曜学校や扶助協会のクラスの教師を何度も果たし、その功績は測り知れないほどである。

しかし、現在の彼女にとって、合唱団の団員として伝道に携わること以上に意義ある責任はない。

「私はどこに行っても、人とお話すの機会に恵まれているようです。私は目が見えませんが、たくさんの人が私に話しかけて下さいます。そんな女性のひとりが、昨年4月にバプテスマを受けました。こうしたことが、私が団員としてここにいる理由かもしれません。」

「でも理由はどうあれ、合唱団の団員であることを私以上に感謝している人は恐らくいないと思います。」(1979年1月27日付「Church News「チャーチ・ニューズ」より)

# 日本福岡ステーク部 組織される

4月20日(金)午後8時より、福岡勤労青少年文化センターにおいて、十二使徒評議員会会員ハワード・W・ハンター長老の管理の下で地方部特別大会が開かれ、日本で8番目のステーク部が組織されました。

ハンター長老はこの大会で「フルタイムの宣教師だけが宣教師として働くのではなく、会員皆が宣教師の働きをすべきです」という言葉をもって、会員に伝道に力を注ぐよう励まされました。

また、以下の兄弟たちがそれぞれの尊い職に召されました。

## 新しいステーク部長会



第一副ステーク部長  
野間 龍一



ステーク部長  
吉沢 敏郎



第二副ステーク部長  
青木 勝洋

高等評議員 一の宮 清  
中村 良昭  
福田 濃  
原 郁夫  
丸谷 昇  
北村 保  
重岡 政信  
大賀 健司  
中本 茂  
宮瀬 英都

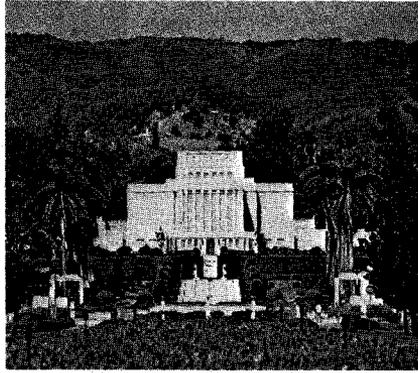
ステーク部幹部書記 吉川 雅英  
ステーク部書記 岸 英治

### 管轄ユニット

福岡ワード部 (米村武敏監督)  
井尻ワード部 (西俣康監督)  
藤崎ワード部 (中川茂監督)  
熊本ワード部 (笠田政輝監督)  
北九州ワード部 (田中武嗣監督)

祝福師 矢野 信保

敬称略



## 夏のハワイ神殿訪問スケジュール決まる!!

東京神殿の建設が順調に進み、来年秋には献堂式が予定されていますが、今年夏のハワイ神殿訪問スケジュールが、次のように決定しましたのでお知らせいたします。今回の訪問は公式の訪問としては最後のものとなります。

㊦(土)	19:15	大阪発	PAN AM 010便(70名)	㊦(火)	神殿の儀式
	21:00	東京発	” 830便(250名)	㊦(水)	”
㊦(土)	7:40	ホノルル着	(大阪発)		19:00 証詞会
	9:05	”	(東京発)	㊦(木)	自由行動日(ホノルル見物)
	12:00	B.Y.U. ハワイキャンパス着	(途中パイナップル畑で休憩)	㊦(金)	11:00 ホノルル発(東京行)
	14:00	神殿オリエンテーション			13:15 ” (大阪行)
㊦(日)		ライエのワード部、支部に分散出席		㊦(土)	13:55 東京着 PAN AM 001便
㊦(月)		神殿の儀式、家庭の夕べ			16:30 大阪着 ” 009便

確保した座席に若干の余裕がありますので希望者はステーキ部または伝道部の連絡員あるいは下記に直接ご連絡下さい。

森村久男(横浜ステーキ部)  
〒251 藤沢市鵜沼海岸7-19-3  
Tel 0466 (36) 4039

神の計画を手伝うことは、女性に与えられる最高の栄誉である。女性は賢明なふさわしい母親となって立派な子供たちを育てることこそ、ほかのどんな職業に見出すよりも大きな喜びと満足を得、人類に対してより大きな貢献をするのである。